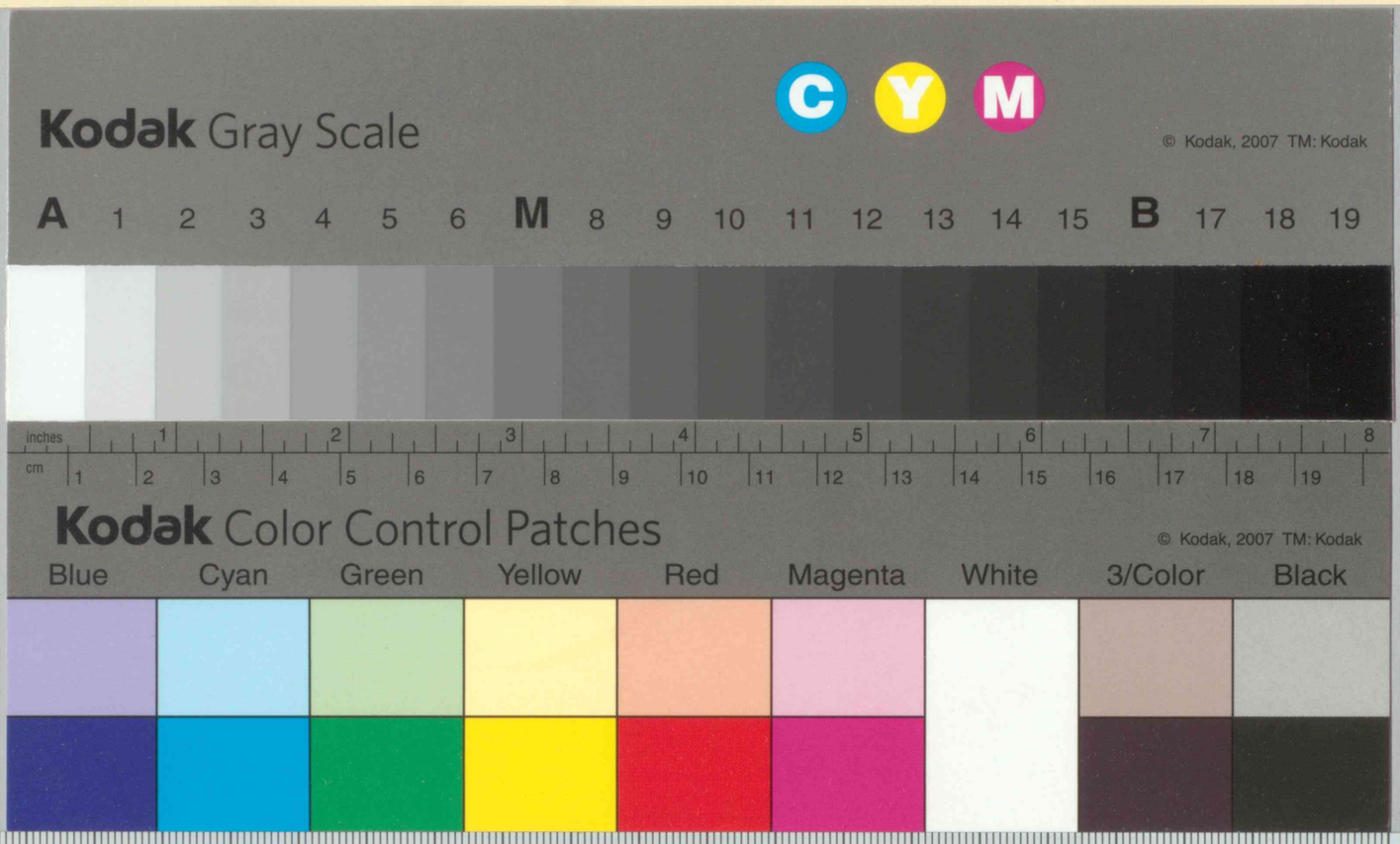
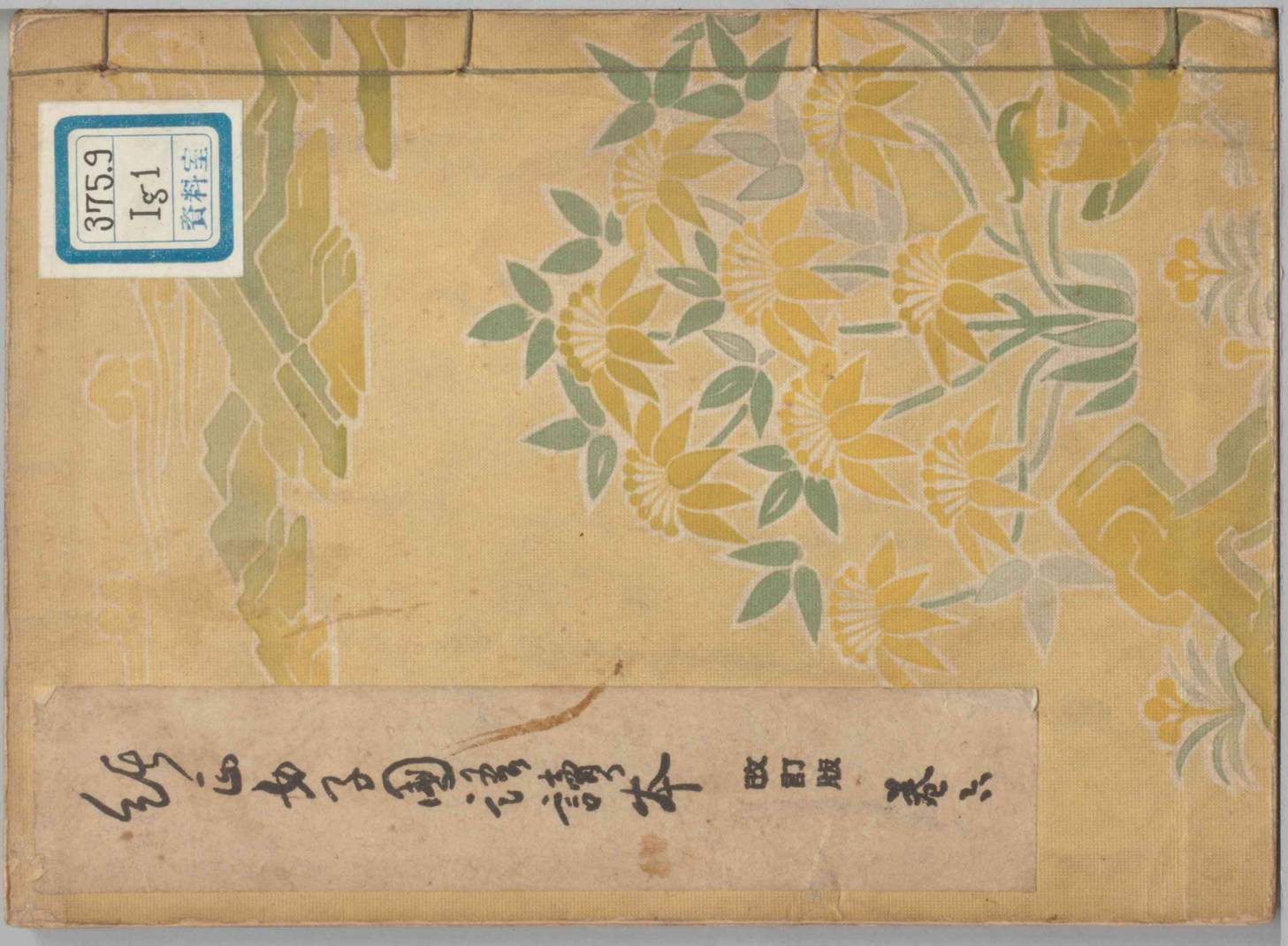
42361
教科書文庫
4
810
42-1938
200039
1516





資料室
3959
I81

昭和十三年二月五日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

廣島大學教育學部
圖書之印

女學校用國語讀本

早稻田大學出版部

35861

生花（安田靫彦筆）

（生花我觀參照）

生花

生花の位取に「天地人」といふ言葉がある。一瓶の中に活けられた一莖の草、一輪の花に大宇宙の姿が壓搾して暗示されるといふ意味であらう。この繪を御覽なさい。清楚な少女の二つの手に痛はり立てられた一莖の萼、その容姿色彩には、自ら瓶中の中心となり、やがてあとから挿し添へらるゝ同類を從へて一つの別天地を創造しようといふ心意氣が見えるではないか。少女の全身は悉くこの花に吸ひ取られて、新しい花の世界を無理なく成立たせようといふ懸命不亂の心境を見せてゐるではないか。

卷六目次

一 御大禮の御發軔を送り奉る　編者　一
二 國民性の核心明淨、直　その一　編者　九
三 國民性の核心明淨、直　その二　編者　一四
四 古鏡　編者　二〇
五 つれ〴〵なるまゝに　兼好法師　二九
六 雲のいろ〳〵　幸田露伴　三五
一夜の雲　三五

二 雨後の雲 三六
三 坂東太郎 三七
四 蝶々雲 三八
五 ゐのこ雲 三九
六 いわし雲 四〇
七 とよはた雲 四一
八 たじろぐ雲 四二
七 夕雲雀（歌） （近世十五歌人）
八 本居翁の遺蹟 芳賀矢一 四八
九 玉かつま抄 本居宣長 五六
一〇 生花我觀 西川一草亭 六〇
一一 童心童眼 吉田絃二郎 六九

一二 ピアノ物語 正宗白鳥 八一
一三 天徳寺琵琶に泣く 湯淺常山 八六
一四 扇の的（平家物語） 八九
一五 東山より不破關まで（東關紀行） 九四
一六 國際に用ゐられた茶の湯 編者 九七
一七 傷をなめる獅子（詩） 高村光太郎 一〇二
一八 運命の丘 その一 島村抱月 一〇六
一九 運命の丘 その二 島村抱月 一一六
二〇 七家句さま〴〵（俳句） （現代七俳人） 一二七
二一 大佛殿の柱くゞり 十返舍一九 一三〇

目次

二二 小鳥に道を說いた聖者 本間久雄 一三六
二三 アイヌ民族の純情 金田一京助 一四三
二四 希望（詩） 土井晩翠 一五三
二五 十六夜日記 阿佛尼 一五五
二六 靜寛院和宮樣 德富蘇峰 一五九
二七 木曾路御通行 島崎藤村 一六九

國立國會圖書館藏書之印

純正女子國語讀本 卷六

一 御大禮の御發軔を送り奉る

昭和三年（二五八八）

昭和三年十一月六日の午前七時である。

宮城前の廣場に充ち滿ちた夥しい奉送者は、水を打つたやうに靜まり返つてゐる。

この沈默の天地を破つて、忽ち「君が代」の喇叭が響いて來た。最大歡喜の興奮に身內の打顫ふのを感じながら、首をさし伸べて鹵簿の出現を待つて居ると、やがて、靴の、蹄の、車の輪の、盛砂を嚙む音が耳に冴えて、朝日にきらめく先驅の三十餘騎が現れた。つゞいて和鞍に跨がつた王朝衣冠の數人が現れた。やがて賢所を奉安

水を打つたやうに靜まり返つてゐる。

靴の、蹄の、車の輪の、盛砂を嚙む音が耳に冴えて。

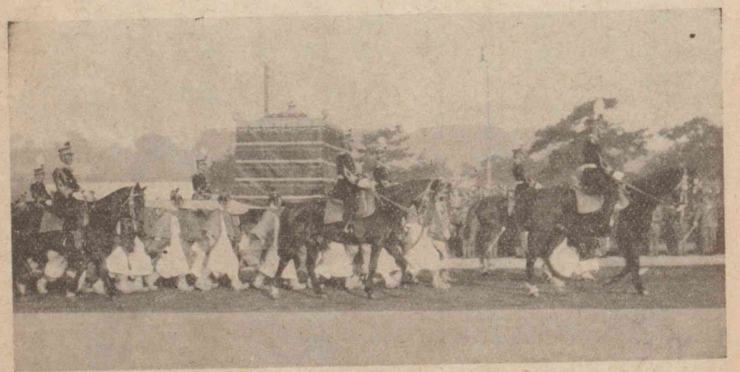
した赤地の錦の御羽車が、黄色の布衣に白い袴を着け、藁沓を穿いた十六名の八瀬の童子に舁かれて、光のやうに神々しく現れさせられた。やがて天皇旗を先立て、騎馬の將校六人に前後を護らせて、六頭立の鳳輦の尊い影が嚴かに現れさせられた。つゞいて同じく六騎の將校に護られた四頭立の皇后宮の御料車が美しく現れさせられた。鳳輦と御料車とのほかに、供奉したる儀裝の馬車が十七臺。鹵簿の長さが五町半。かくてこの大鹵簿は、二重橋の袂から東京驛の驛頭に至るまで、路の兩側を埋め盡くした無數の臣子の忠愛の一念に包まれ、鳳輦の御通過につれ、堵列した各隊の順次に吹奏する「君が代」の喇叭に送られて、肅々と東京驛に着かせられた。そしてやがて御大禮の奉仕に、人も、神も、山も、川も、魂を千千に碎いてゐる千年の歴史の京都に赴かせられた。

五町半　約六百メートル。
無數の臣子の忠愛の一念に包まれ。
人も、神も、山も、川も、魂を千々に碎いてゐる千年の歴史の京都。

これは今上陛下が御卽位の大禮を行はせらるゝため、京都に行幸ましました御鹿島立の模樣の略記である。我々はその朝、二重橋に眞向ひの芝生の上に立つて奉送した。我々は朝の二時に、或所に集つて、三時前にそこに着いた。雨催ひの熱苦しい夜であつたが、空はやがて拭ふが如くに晴れ渡つた。やがて四時となつた。四時は兩陛下御起床の時刻だといふことである。同時に賢所移御の御式の始る時刻だといふことである。もう、掌典長等が鞠躬如として、賢所の大御前に神饌を供へてゐることであらう。

鹿島立。

鞠躬如。



御羽車

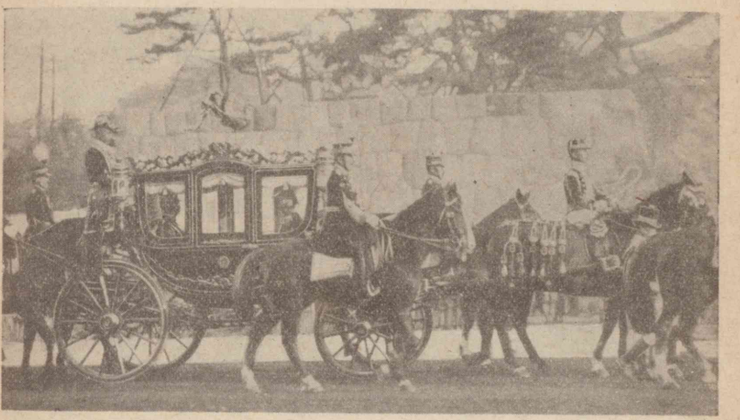
もう掌典長の祝詞が告り始められたであらう。もう十一人の樂官が、貴き御灯の光を浴びつゝ神樂歌を奏し始めたであらう。御出門の時刻もやがてである。もう、賢所を御羽車に移し參らせたであらう。同時に天皇陛下も后ノ宮も「庭上下御」の御儀として、御內庭の地上に降り立たせられたであらう。もう、御旅立の賢所に御挨拶の御拜があつたであらう。もう、御車寄に出でまして、鳳輦に乘御あらせられたであらう。今こそ、五町有餘の長い〳〵大鹵簿が、肅々として動き始める時刻である。など、時計を見ては、固唾を呑みつゝ待ち設けてゐると、正七時の時を違へず、嘹喨たる「君が代」の喇叭の第一聲が、嚴かに響いて來たのであつた。

今こそ、五町有餘の長い〳〵大鹵簿が、肅々として、動き始める時刻である。

この曉の自然の麗しさ、神々しさは、言語に絕してゐた。秋の夜の高き空が、いつしか霞み始めて、六日の有明月が大內山の樹立近くさしかゝると、東の空が次第々々に白んで來る。同時に馬場先、日比谷の向うに聳え立つてゐる鐵筋の大建物が、空線を破つてその巨大な姿を眞黑に浮かし出す。その中の最も巨大なる數者は、刻々に明るくなる東雲の空を背景にして、小旗を吊した綱の脈かに張りわたされた屋頂の凸凹を、滿艦飾の軍艦のやうに、鮮かに見せて來る。やがて、あちこちのぼんやりした奉祝塔が、はつきりと見えて來る。黑白、明暗の二色にのみ見えてゐた世界が、無數の美しい色彩を見せて來る。その中に、夥しい兵士が拔劍した將校に率ゐられて、規則正しい足並で陸續と繰込んで來る。「氣ヲツケ！」「右ヘナラヘ！」の號令が、方々から起つて、カーキーの勇士が行幸道路を挾んで整然と堵列する。やがて長い〳〵四列の生垣が出來あがる。四列の陰には、憲兵が數尺おきに一人づつ、正しき距離を取つて、後向きに立ち並んだ。その陰には、更に警官が二三間おき

空線を破つてその巨大な姿を眞黑に浮かし出す。

一尺　約三十センチ。
一間　約百八十二センチ。



鳳輦

金衣羽帽の大官等が、服裝に、冠帽に、それ〴〵所屬の誇を見せて。

喩へば春の花と、秋の薄と、金銀七寶の人工美術とを一つに集めたかのやうである。

に一人づつ、これも後向きに立ち並んだ。奉送者を監視するためであらう。その中に金衣羽帽の大官等が、服裝に、冠帽に、それ〴〵所屬の誇を見せて、二重橋の石橋の直ぐ前の廣場の兩側に所狹く立ち並んだ。

喩へば春の花と、秋の薄と、金銀七寶の人工美術とを一つに集めたかのやうである。かくして文武の諸大官を始として、堵列の各軍隊や、學生や、在鄉軍人や、青年團や、諸官公署及び各種の社會事業團體等の奉送者が、悉くその在るべきところに落ちついた。

織塵。

曠古。

この時である。嚠喨たる「君が代」の喇叭の第一聲が、曉の沈默を破つたのは。

つゐた。

最後に盛砂が敷き均されて、織塵をもつけぬ一筋の黑い路が目も遙かにつゞく。

朝日はあか〳〵と輝き出でて、曠古の盛儀の一切の準備の出來上つた瞬間を照らしてゐる。

草も、木も、空も、土も、悉く奉送の眞心を一つにして、億衆の眼は、一齊に大內山、二重橋に向ふ。この時である。嚠喨たる「君が代」の喇叭の第一聲が、曉の沈默を破つたのは。

昭和三年十一月六日の朝に於ける大行幸の御發軔は、實に言語に絶した、美しい、嚴かな、そして神々しい御門出であつた。御卽位の大禮を行はせられんがため、皇祖の御靈の御羽車に陪し、劍璽を奉じて、千年の舊都に向はせらるゝ大行幸の御門出である。太田

道灌以來數百年間の武將等が、武家文化の粹を集大成してさゝげ奉つた大千代田城を出でさせられ、王朝の衣冠、現代の禮裝、その他の歷史美を麗しく兼ね備へた大調和の大鹵簿を率ゐさせられての御門出である。舊きを紹ぎて新しきを大成すべく、祖宗に誓ひ、臣民に宣らせ給はんがための御門出である。宮城より東京停車場に至るまで、畏くも、絕えず御慈みの御會釋を奉送の大御寶に賜はつての御門出である。天高く氣清き瑞光の秋の曉に、天の、地の、人衆の、映えに映え榮えに榮えて、聖天子の大行幸を送り奉り壽ぎ奉る御門出である。我等は今日の御發軔の盛儀を拜して、そゞろに、天智天皇の御宴に侍して、大友皇子の奉られた五絕の御詠を思ひ出だした。

皇明光二日月一　帝德載二天地一
三才並泰昌　萬國表二臣儀一

太田道灌　幼名鶴千代、元服して源四郎持資と稱し、剃髮後道灌と號した。長祿元年（一四五七）江戸城を築いてこれに住した。

絕えず御慈みの御會釋を大御寶に賜はつての御門出である。

天智天皇　第三十八代（御在位　一三二―一三七）

大友皇子　後の弘文天皇。第三十九代（御在位　一三七―一三八）。天智天皇の皇子。

恭しく惟るに、皇恩の洽く、國威の盛んに、而して、天、地、人、三才の泰昌なること、千古未だ今日の如きはない。我々は今日の盛儀を仰ぐにつけても、切に〳〵この聖代に生を享けたことの幸福を感ずるのである。

二　國民性の核心明、淨、直　その一

文武天皇が御卽位の際に下された宣命の中に、

明き淨き直き誠の心もちて、いやすゝみ〳〵て、緩怠することなく、務め結りて仕へまつれ。

といふ御詞がある。

我等はこの宣命に在る「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。この語は代々の詔勅に幾度も〳〵繰返されてゐる、しかも重きを措いて繰返さ

文武天皇　第四十二代（御在位　一三五七―一三七）

宣命　天皇の大命を純粹の國語を以て宣布した文書。漢文の詔勅に對して國風の詔勅をいふ。

明淨直の三つが日本人の性質中の中心である。

古事記　三卷。和文で書かれた我が國最古の歴史文學。開闢より第三十三代推古天皇の御代まで。

日本紀　三十卷。漢文で書かれた我が國最古の編年體歴史。日本書紀ともいふ。神代から第四十一代持統天皇の御代まで。

萬葉集　二十卷。我が國最古の歌集で、主として奈良朝時代の歌を收めてゐる。歌の數四千四百九十六首。

れてゐる。その他『古事記』『日本紀』『萬葉集』等に於て、重々しい場合に幾たびも用ゐられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じた事、大和民族に最も濃厚に最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢〻發したのではないか。世に大和民族の特性と稱せらるゝ現實、光明、活動、向上、中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅等の諸性質は、概ねこの明、淨、直の三大性を基本として說明されるらしく、殊には、三種の神器がこの三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。抽象的ではあるが、左に一通りその理由を說明して見たいと思ふ。

鏡の性は「明」で、その德は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡のやうな明るい心を以て正しく事物を觀た。故にその見方は概して公平無私で、白い物は白いとし、黑い物は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大御神は鏡を齋きて我が大御前を見るが如くせよと仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔敕や祝詞や君臣應對の詞などに「明き心」といふ語が繰返し用ゐられてゐる。これらはいづれも、この性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據であると考へる。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には政治、社會、宗教の諸方面に亙つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突がない。無いではないが割合に少く、またいつも大抵のところで折り合つて調和するといふ傾がある。例へば、異主義が新たに外國から入つて來る。毛色が變つてゐるので、暫くは爭ふが、やがて雙方に道理も無理もあることが解つて來ると、愚かしい爭論が續けられなくなる。そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事この通りである。まづ儒

祝詞　祭祀やこれに類する儀式の際に神前に於て唱へる詞。その一部は奈良朝以前に成立した我が國最古の文章。

毛色が變つてゐる。

騎虎の勢の意地喧嘩。

まづ儒教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふので、早速傭ひ入れて、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくして儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護者となつた。

至尊の御身　聖武天皇の御事。

國家人民の云々　上杉鷹山の「讓封之詞」の中にある。

教が入つて來た。至つて尤もらしい事をいふので、早速傭ひ入れて、我が固有の倫常に理窟をつけて貰ふ。かくして儒教は長へに我が國風の忠實なる辯護者となつた。佛教が入つて來た。餘りに奇怪なので、暫くの間押問答がある。やがてその說き方の巧みなのに打込むと、何等の芥蒂なく中心から歸依してしまふ。至尊の御身を以て自ら三寶の奴と名乘らせらるゝやうになる。けれども天位の妖僧に歸するを見ては、さすがに默つては居らぬ。かくして遂に兩部習合といふ利巧な調和案が成立つた。キリスト教も幾度かの爭が濟んで、もうそろ〳〵日本のものに成りかけて來てゐる。あの位の騷で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆この「明」といふ基本的國民性の賜ではないか。馬上に天下を得た武將が文藝の奬勵に骨を折るのも、封建專制の君主が「國家人民のために立

陣中云々　敵ぞとて云々　共に新納武藏守忠元の事。

古今集　二十卷。我が國最初の敕撰和歌集。醍醐天皇の延喜五年（九〇五）に成る。

事を見ること明らかに、理に從ふこと流るゝが如き根本性。

十字軍　聖地回復の戰爭。（1096—1291）

フランス革命（1789—1792）

てたる君にて、君のために立てたる國家人民にあらず。」などいふのも、群雄割據の亂世に、陣中篝火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じ戰國に「敵ぞとて何かは人のにくからむ同じ御國の同じ身なれば」と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ、僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、皆一つは事を見ること明らかに、理に從ふこと流るゝが如き根本性によるのではないか。

大和民族は十字軍やフランス革命の如き極端な芝居を演ずるには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を「公正」といひ、「理に銳し。」といひ、「感情の平靜を保つ。」といひ、「何事をも受け入るゝ胸懷洞然たる人種なり。」と言つた外人の批評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。

三　國民性の核心明、淨、直　その二

清淨の德は玉に於て絶好の標章を見出だしてゐる。淨と明とは、似てはゐるが同じくはない。そしてその異なる趣はちやうど鏡と玉との異なる趣に似てゐる。汚穢混濁を忌むことは清、明、共に同樣であるが、清はそれ以上に味はひがあり溫かみがあることを要する。譬へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すことを要せずして、溫潤の光、圓融の相（すがた）、澄徹の趣のあることを要するが如きものである。本來日本人は明らかに事物を見る長所があるのみならず、外物を見るにも、自分を發表するにも、一種の味はひある態度を具へてゐた。その明は空白の明ではなくして、溫潤、圓融、澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶、夜光珠の明である。我が國には古來（みそなは）、

鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すことを要せずして、溫潤の光、圓融の相、澄徹の趣のあることを要する。

歌詠諷謠。
趣味風韻。

戰陣云々
梶原景季が箙の梅の故事。
歌詠を贈答
源義家と安倍貞任の故事。
兜に香
木村重成の故事。

祓（はらひ）が多く行はれ、廣く用ゐられ、且つ重要視されてゐた。祝詞、宣命を初として、多くの歌詠諷謠は明き心を現しながら同時に趣味風韻に富んでゐた。しかもその趣味や形容は、諸外國例へば支那の文學に見るが如き誇張の弊がなくして、よくその實を現し、中味にふさはしい修飾を纏うてゐた。

花と武士（弦齋舍畫迹）

むくつけき武人にも戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は兜に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ〴〵ふさはしい文學を有つてゐる。外國出稼ぎ

の勞働者がその日の生活に窮しながらも、猶ほ一二の植木鉢を持たぬはなく、そしてそれは外國の勞働者には絶えて見ぬところだといはれてゐる。大工や指物屋の手に成るはかなき家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反して、我が國のは見えぬ裏面にまで手を盡くすといふ嗜みがあるといはれる。これらはいづれも大和民族が淨きを愛する根本性の現れたものではないか。我等は「日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より勞働者に至るまで皆美術を愛翫す。」と言つた一外人の批評が、必ずしも虚妄ではないと信ずる。

審美眼。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふところは、躊躇、緩慢、首鼠兩端である、曲ること、拗ること邪なることである。叢雲の劍はその標章としてこの上もなく相應はしい。元來直の德の本領は心の明らかに見たところに向つて直前するにある。若し右の三德を一括してこれを一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見たるところをば、意が直前して實現する、そして知の見方、意の働き方に潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て「父母」を見れば尊し、妻子見ればめぐし愛し」、故にその明き心の示すところに從ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば「八隅知し大君」「現つ神」として國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直前して「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公をいたす。この通りである。しかしてその君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別、利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。こゝが眞淵、宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつたところである。無論どこの國にも文化の進まぬ時代

父母を云々　萬葉集、山上憶良の歌。

海行かば云々　萬葉集、大伴家持の歌。

その君父に事へ妻子を愛するや、多くは水臭い思慮分別、利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき趣があつた。

には、かやうな自然的のところがあつたであらう、また日本民族にも利害勘定的の行爲が無かつたとはいはれぬであらう、また自然直實の行爲に弊害が伴なはぬともいはれぬであらう。けれども我が民族の特長の一面は、とにかくこゝに在つたやうに思はれる。その例は、遠い昔では須佐之男命である。勝ちすさんでは前後を顧みず高天の原を震動される、罪せらるれば命を畏みておとなしく邊土に行かれる、出雲では櫛名田姫の不幸を見て、危險をも顧みず、直ぐに八俣の大蛇を退治される。寶劍を得ると、これを先きに敵なうた天照大御神に上られる。行り方がきび〳〵していかにも直、斷、決の文字そのまゝのやうではないか。次いでは倭武尊、それから降つては、鎭西八郎爲朝が腕白、勘當、九國押領、京師召還、保元勇戰、大島配流の一生、これも須佐之男命系の大立者で、これらはいづれも向う見ずの亂暴者でありながら、不思議に情に厚いところがあり、君父の事とあれば水火も辭せずに直前するといふ風がある。直、斷、決、勇の權化で、たしかに大和民族固有性の一面を脊負つて立つヒーローである。その他蒙古の來寇に、西海の將士が身命を棄てて防戰した態度を見よ。代々の武士が、千萬の軍なりとも言擧せず、取りて來ぬべき斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠、加藤清正の如き、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇さるゝを見よ。曾我の五郎、朝比奈三郎の如き一徹者の國民に愛さるゝを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたるを見よ。おッと出せば、やッと受ける金平淨瑠璃の流行したる趣を見よ。眞僞は知らず、「正直は一旦の依怙に非ずと雖も終に日月のあはれみを蒙る、謀計は眼前の利潤たりと雖も必ず神明の罰にあたる。」といふ戒が、天照大御神の御言として神道家に唱へられてゐた。武士は「七息思案」といふ諺があつて、分別も久しくすればねまる、武士は物事手取早

千萬の云々　萬葉集。高橋蟲麿の歌。

豁然大悟。

金平淨瑠璃　淨瑠璃節の一種。坂田金時の子金平を主要人物とする人形芝居並びにその文章。

分別も云々。　山本常朝の『葉隱』にある。

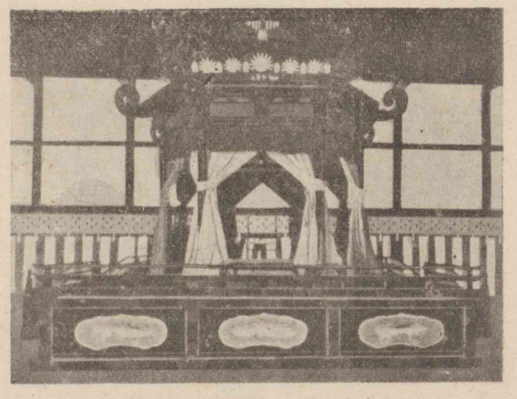
にするものぞといふ事が、武士道の金戒になつてゐた。これらはいづれも直きを好む性質が大和民族の心性の基本精髄を成してゐる證據である。

（『新國文學史』）

「かゞみ」の語原には「赫見」と「影見」と「屈見」との三說があります。

四　古鏡

三種の神器の第一に鏡が數へられてゐるのは、鏡に取つて誠にこの上もない名譽であります。「かゞみ」の語原には「赫見」と「影見」と「屈見」との三說があります。赫見はびか〳〵と輝いて見えるといふ、その性質について言つたのでありませう。影見は我が姿の映つた影坊子を見るといふ、その用途について言つたのでありませう。屈見は身をかゞめて止水の面を見たのが鏡のはたらきを知る初だといふ、最初の起りについて言つたのでありませう。また漢字で鏡や鑑と書く文字の起りははつきりしませんが、要するに金屬を主材とする點に重きを措いたのでありませう。それ〴〵に捨てられぬ面白味がありますが、殊に面白いのは、我が古典よりも寧ろ有難く尊いのは、我が古典が鏡を以て皇祖天照大御神の御象を寫したものとしてゐること、及び皇祖御みづから鏡を以て我が魂と仰せられてゐることであります。



高御座の鏡

我が國に於ける鏡製作の起原は天照大御神の天岩戸入の時にあるといはれます。『古事記』などの古典にあるではありませんか。――大御神がこもらせられると、天地六合が眞暗になつて、晝くる時なき常闇が世界を領した。これを憂へて高天原なる八百萬の神達が、天安河原に

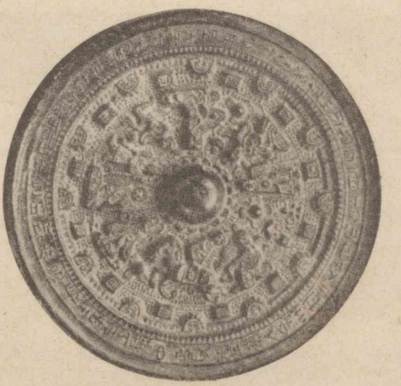
有難く尊いのは、我が古典が鏡を以て皇祖天照大御神の御象を寫したものとしてゐること、及び皇祖御みづから鏡を以て我が魂と仰せられてゐることであります。

（御卽位の御大典に天皇陛下の着かせられる高御座には、古來その棟に大小の鏡を飾られる例である。）

古事記
（前出一〇頁）

天地六合。
常闇。

會合して、大御神の御怒を御なだめ申す謀を相談された。その時に、思兼神といつて、人幾倍の思慮を兼ねた工夫家の智慧者がとくと考を凝らした結果、これは大御神樣の御象をそつくりに寫し造つて誘ひ出し申すがよいといふことになつて、それから天金山といふ鑛山から、性のよい鐵を選み取つて、鍛冶の名人天津麻羅といふを呼び寄せ、石凝姥命を係長として、立派な鏡を作らせた。



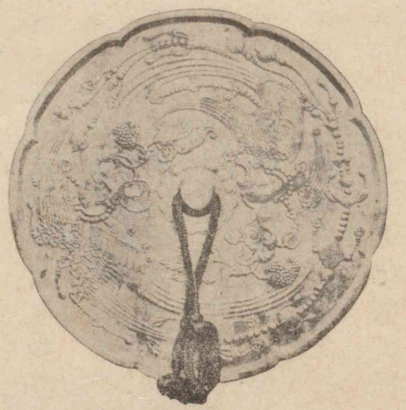
上古の鏡

それが卽ち神器の八咫鏡で、それを天の香山産の立派な眞賢木の、緣に光る枝の眞中に取懸けて、岩屋戸の前に立て、天鈿女命といふ舞踊の天才が、その前でうつろの舞臺を蹈みとゞろかして、面白をかしく舞ひすます。それを見て八百萬の神々達がどつと笑ひ興ずるうつろの舞臺を蹈みとゞろかして。

のを、大御神が怪しませられて、窟屋の戸を細めに開けてお覗きなさる。とたんにこの鏡を向けて、「おや！自分にまさる日の神があるのか？」とお怪しませ申す。かくして難なく大御神を出だし奉つた——といふことが。その後天孫降臨の折に、大御神御手づからこの鏡を皇孫に御授けなされて、

「この鏡は我が魂であるぞよ。我に愼み仕ふる如く、大切に奉仕せよ。」

と仰せられたのでした。卽ち八咫鏡はもと大御神の光り輝く御象を寫し奉つたので、それさへ畏れ多いのに、更に御魂として一種の神祕な靈力を加へて下さつたのでありました。



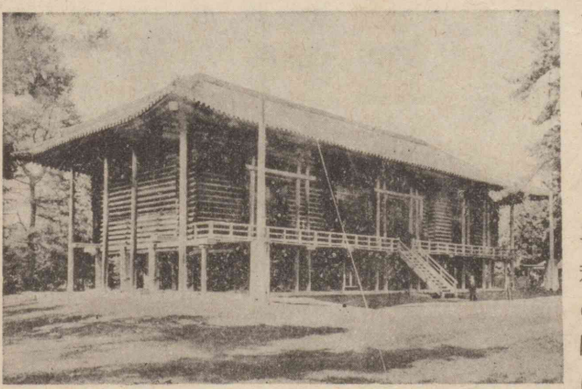
奈良朝の鏡

神祕な靈力。

死後を潔くする嗜み。

什器

一般的にいふと、鏡はもと影を取つて我が容姿服裝を正す器で、我々の祖先は男も女も一樣に調法したものであり、平和の時は勿論、時には戰陣にも携へて、死後を潔くする嗜みに備へたものでありました。古墳を發掘するとよくいろ〳〵な鏡が出土して來ますが、これは無論亡骸と共に柩の內に納めたので、その鏡は恐らく生前に用ゐてゐたものを、死後に伴なはせようとしたのでありませう。これによると、鏡が上代人の最も愛用した什器の一つであつたことが想像されます。奈良の正倉院にはいろいろの立派な御鏡が澤山あつて、その中には直徑七尺といふやうな珍しいのがあり、それらは聖武天皇が御生前に御愛翫になつたものでありますが、中には天皇御自身に用ゐさせられたのもありませう。平安朝時代には、花山天皇が御修行の折御笠の內に鏡を入れて携へさせられたと申します。これらは當時男子が常に鏡を用ゐてゐたこと、また或は懷に、或は笠の內に入れてゐたといふことを暗示するものであります。



正倉院

山東京山の『歷世女裝考』には、柄つきの鏡は衣冠を着けた後、冠や襟などを照し見る便利のために出來たものであらうといつて居ります。また足利義政の東山殿書院には、柱に鏡を掛けてあつたものと見えて、「柱飾鏡」といふものの圖が『東山殿御飾記』に出て居り、そしてそれが衣冠を正すために用ゐられたといふことを記してあります。能舞臺には、樂屋の端、橋掛の手前に鏡の間といふのがあつて、大きな鏡を据ゑてありますが、あれを見ると、室町時分の樂

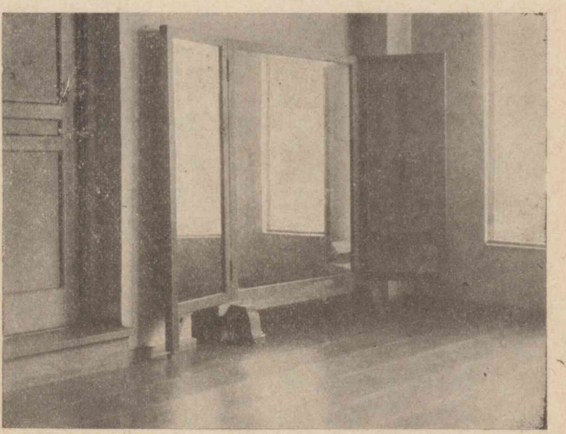
聖武天皇　第四十五代。（御在位　一三八四―一四〇九）

花山天皇　第六十五代。（御在位　一〇四四―一〇四八）

山東京山　江戸末期時代の戲作者。本名岩瀨百樹、通稱鐵梅。安政五年（一八五八）歿、年九十。

足利義政　義教の子、足利六代將軍。義滿の金閣寺に倣つて銀閣寺を造つた。延德二年（一四九〇）歿、年五十七。

師が、出場の直ぐ前に大鏡面に照らしてその容姿を整へたことが察せられます。また源義經が靜御前に別れる時に、鬢の鏡を取出して形見としたといふ話があるのを見ると、あの頃は立派な武人が戰場に鏡を携へて最期を潔くする嗜みの一具としたのでせう。

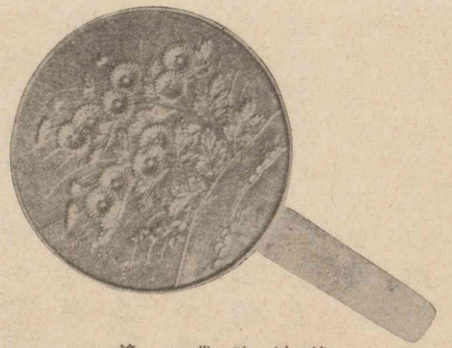


（圖は東京市本郷區水道橋實生流能舞臺裏の鏡の間である。）

武家時代には、男子が刀を腰より離さずして、これを男の魂としたのに對し、婦人は常に鏡を懷中して、これを「婦人の魂」とさへいふやうになつた。

かやうに、鏡は大昔から容姿服裝を整へる道具として男女ともに用ゐたので、これは昔も今も變りのないことでありますが、しかしながら、婦人は男子よりも特に粧ひに心を用ゐる結果、武家時代には、男子が刀を腰より離さずして、これを男の魂としたのに對し、婦人は常に鏡を懷中して、これを「婦人の魂」とさへいふやうになつたのであります。

西洋の玻璃鏡は、向うでは十四世紀に始めて作られたものでありますが、玻璃製の器物の我が國に輸入されたのが足利の末期からであるところから推すと、玻璃鏡の輸入されたのも、多分その頃以後であつたのでせう。とにかく我が國の近世に於ける玻璃の製造は、文化年間頃に始るといひますから、廣く玻璃鏡が用ゐられるやうになつたのも極めて新しいことであります。それにも拘らず、今日鏡といへば殆どガラス製の鏡の通稱の如くに考へられ、大昔から久しきに亙つて重く用ゐられた金屬鏡が、骨董



德川時代の鏡

文化年間　元年（一八〇四）―十四年（一八一七）

品としてわづかに名殘を留めるやうになつたのは、誠に歎かはしいことでありますが、しかしながら考へやうによつては、これが寧ろ我が國の神鏡の威靈を長く嚴かに傳へる所以でもありませう。全國大小の神社は悉く本殿に光明赫奕たる神鏡を奉安して、あまねく人々の崇敬を集めてゐるではありませんか。明治天皇崩御のみぎりには、多くの鏡が御大葬の御榊に掛けられました。そして平生御使用の御鏡をば、御劍と共に桐の御函に入れ、皇太后陛下最後の御心づくしとして玉棺に納めさせられたといふではありませんか。最も尊きところにのみ、最も尊き場合にのみ嚴かに用ゐられる、これが寧ろ鏡に取つての名譽であり、また鏡を大切にいつきかしづく所以であらうかと思はれます。

明治天皇
明治四十五年（一九一二）崩御。

皇太后
昭憲皇太后。大正三年（一九一四）崩御。

最も尊きところにのみ、最も尊き場合にのみ嚴かに用ゐられる。

五　つれづれなるまゝに

兼好法師

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。

人は容貌ありさまの勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、あかず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ口惜しかるべけれ。品かたちこそ生まれつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり顔にくさげなる人にも立ち交りて、かけずけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

兼好法師
吉野朝時代の歌僧、隨筆家。姓は卜部。京都の吉田に住み、吉田兼好ともいつた。正平五年（一三五〇）寂、年六十八。

雪の面白う降りたりし朝人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪の事何ともいはざりし返事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどのひが〳〵しからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。返す〳〵口惜しき御心なり。」といひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れ難し。

家居のつき〴〵しく、あらまほしきこそ、假の宿とは思へど興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみ〴〵と見ゆるぞかし。今めかしく、きらゝかにはあもじたいがきて自然の草もどこまでも心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うち有る調度も昔覚えてやすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くの工の心を盡くして磨き立て、唐の大和の珍しく、えならぬ調度どもならべ置き、前栽の草木まで心のまゝならず造りなせるは、見る目も苦しくいとわびし。

源好法師

心のまゝならず造りなせるは、見る目も苦しくいとわびし。

後徳大寺の大臣　左大臣藤原實定、建久二年（一一九一）薨。

西行　鎌倉時代の歌僧、俗名佐藤義清、建久元年（一一九〇）寂、年七十三。

綾小路宮　亀山天皇の皇子性惠法親王。

ながらへ住むべき、また時の間の煙ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。おほかたは家居にこそ事ざまはおしはからるれ。

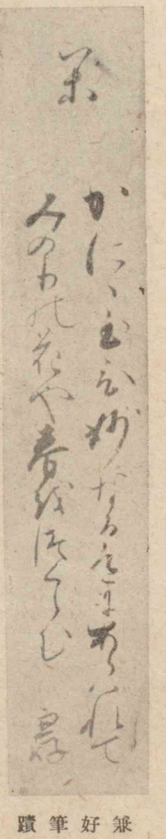
後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらん、何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ。」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、彼の例思ひ出でられ侍りしに、誠や烏の群れゐて、

池の蛙を捕りければ、御覽じ悲しませ給ひてなんと、人の語りしより、さてはいみじくこそと覺えしか。德大寺にもいかなる故か侍りけん。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく造れり。志田の某とかや、知る所なれば、秋のころ、聖海上人その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲を拜みて、ゆゝしく信おこしたり。

御前なる獅子狛犬そむきて、うしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、この獅子の立ちやういと珍し。深き故あらん。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。」といへば、おの〳〵怪しみて、「まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顏したる神官をよびて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひあることに侍らん。ちと承らばや。」といはれければ、「その事に候。さがなき童部どもの仕りける、奇怪に候事なり。」とて、さしよりて、据ゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。愚かにして怠る人のためにいはば、一錢かろしといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これをはこびてやまざれば命を



閑香にほひ妙なる色にあらはれてみのりの花や春をつぐらむ　兼好

兼好筆蹟

殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。

終る期忽ちに至る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念むなしく過ぐることを惜しむべし。

八つになりし年、父に問ひて曰く「佛はいかなるものにか候ふらん。」と言ふ。父が曰く「佛には、人のなりたるなり。」と。又問ふ「人は何として佛にはなり候ふやらむ。」と。父、又「佛の教によつて、なるなり。」と答ふ。又問ふ「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける。」と。又答ふ「それも又、さきの佛の教によりて、なり給ふなり。」と。又問ふ「其の教へ始め候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」と言ふ時、父「空よりや降りけん、土よりや湧きけん。」と言ひて笑ふ。「問ひ詰められて、得答へずなり侍りつ。」と、諸人に語りて興じき。

（『徒然草』）

徒然草　博學で世故に長けた脫俗傍棄好が、興の赴くままに書きつけた隨筆集。すべて二百四十三段。

幸田露伴　小說家、文學者　文學博士　名は成行　東京の人　慶應三年生

青白くさわだちて。　丑三つ　午前二時半頃。

六　雲のいろ〳〵

幸田露伴

夜の雲

夏より秋にかけての夜、美しさいふばかりなき雲を見ることあり。都會の人多くは心づかぬなるべし。舟に乘りて灘を行く折、天暗く水黑くして、月星の光洩れず、舷を打つ浪のみ青白くさわだちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つとも思はるゝ頃、艙上に獨り立つて、海風の面を吹くがまゝ、衣袂濕りて重きをも問はず、寢られぬ旅の情を遣らんと詩など吟ずる時、稻妻忽として起りて、水天一齊に凄じき色に明るくなり、千疊萬疊の濤の頭は、白銀のかんざしたる如く輝き立つかと見れば、怪しき岩の如く、獸の如く、山の如く、鬼の如く、空に峙ち蟠りゐし雲の、皆黃金色の笹緣つけて、いと嚴かに人の眼を驚かしたる、いはん方なく美し。

遠近の雲の往來。

足疾く風に乘りて空に翔くるが。

山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるは這

雨後の雲

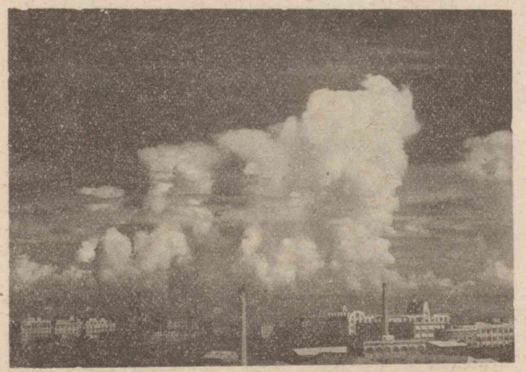
雨後の雲の美しさは山にてこそ見るべけれ。低き山にゐたらんには、猶ほかひなかるべし。名ある山々をも眼の前、脚の下に見る程の山に在りて、夏の日の夕など、風少しある時、谿に臨みて遠近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の色の翠ひとしほ增して、裾野の風情も見どころ多く、一郭なせる山村の寺などそれかとも見ゆるに、濃く白き雲の足疾く風に乘りて空に翔くるが、己の形をも、且つ龍の如く且つ虎の如く、飜りたる布の如く、張りたる傘の如く、樣々に變へつゝ、山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるは這

雨後の雲（中央氣象臺撮影）

ふやうに去るかと見れば、後なるは飛ぶ如くに來りなんどする狀、觀て飽くといふことを覺えず。小山の峯通り立てる松の並木の、遠見には馬のたてがみのやうなるが、現れつ隱れつする、金字形したる山の巓の心あてに見しあたりならぬ所に突として面出す、殊に面白し。

坂東太郎

丹波太郎は西鶴の文に出でたりと覺えたり。坂東太郎は未だ古人の文にその風情を記されざるにや。雲にも人に知らるゝ知られざるのあるもをかし。坂東太郎は東京にて夏の日など見ゆる恐しげなる雲なり。夕立の今や來らんといふやうなる時、空の半ばを一面に蔽ひ



坂東太郎（中央氣象臺撮影）

西鶴　江戸時代の小說家、俳人。大阪の人。元祿六年（一六九三）歿、年五十二。

て、十萬の大兵、野を占めたる如く、動かすべくもあらぬ狀に黑みわたり、しかもそのうちに風を含みたりと覺しく、今や動き出さんとする風情、まことに一敗の後の將卒、必死を期して悉く靜まり返つたるが中に、勃々として抑ふべからざる殺氣を含めるが如し。この雲天に漲るとやがて、風ざわ〳〵と吹きおろし、雨どつと落ちかかり來るならひにて、あらしめきたる空合にこの雲の出でたる、またなく物凄じく、をかしき形などある雲とは異なりて、秋水の千里を浸し犯す如く出で來れる、宏壯の趣ありて、心弱き兒女の愛する能はざるものなり。

秋水の千里を浸し犯す如く出で來れる、宏壯の趣ありて。

蝶々雲

風吹く時、はなれ〳〵になりたる大きからぬ雲の、色白き或は薄黑きが、蝶などの如くひら〳〵と風下へ舞ひつ飛びつして行くあり。これを蝶々雲とは、面白くも名づけたるものかな。

ゐのこ雲

蝶々雲は古き歌に見えたりや否や知らず。ゐのこ雲といへるは仲正の歌に見えたり。夏の夜、秋の夜など、雨もたぬ空の晴れたるに、ひとかたまりの雲のゐのこの如く丸く肥えて見ゆるが、月のあたり走り行くは人々の知るところなるが、これもまた風情ある雲なり。「空拂ふ月の光におひにけり走りちりぬるゐのこ雲かな」と詠める歌は、面白しとも思へねど、ゐのこ雲といふ名を傳へたる功は、この歌にあるべきにや。

仲正　源仲正。空拂ふ云々の歌は夫木集卷十九にある。

いわし雲

天明　第百十九代光格天皇の時代（一七八一―一八〇一）で、文學史上德川時代の後期。

信實　藤原氏、右京權大夫。文永二年（一二六五）歿、年八十九。

後鳥羽天皇　第八十二代。（御在位一一八三―一一九八）

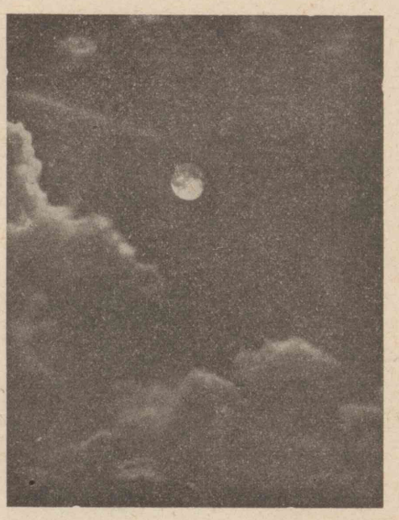
天智天皇　前出（八頁）

いわし雲といふは、いわしなどのむらがる如く、點々相連なりて空に漲るものをいふなり。晴れたる日の夕暮など多く見ゆるなるが、雨氣を含むものにや。さてはみづまさ雲と同じかるべし。「芝浦の漁人も網を打忘れ月には厭ふいわし雲かな」といへる狂歌、天明の頃の人の詠にあり。青き空の半ばほど、この雲白く連なりてわたれる、風情ありてうるはし。童兒などは、この雲を指さして、

いわしの取るゝ兆なりといふもまたをかし。

とよはた雲

とよはた雲とは、しかと雲の名にはあらぬなるべし。信實の歌にては、夕立する頃の例のいかめしき雲をいへるが如く、後鳥羽天皇の御製にては、只美しき夕の雲をさし給へるが如し。「わだつみのとよはた雲に入日さし、こよひの月夜あきらけくこそ」といへる天智天皇の御製に見えたるがはじめなるに、御製にては、旗の形なせる、やうの夕の雲をいひ、たまへるのみなり。雲の旗の如く見ゆることは多し、旗雲といふ語は今なきやうなり。



夜の雲

たじろぐ雲

風の力おとろへ、雲の行くこと少し遲くなりて、天のなほ黒きが中より星のきらきら見ゆること、雨の後などにはあるものなり。さる折の雲の得行きもせず、止まると、いふにもあらで、たゆたふやうなるが、月星などの光あるに氣壓さるゝかと見ゆるさまなるを、たゞいざよふ雲といはんもをかしからず、たゞよふ雲、たちまよふ雲、行きまよふ雲などいはんも興なし。「はれぬるかたじろぐ雲の絶え間より星見え、そむるむら雲の空」と

僧契沖　國學者　大阪圓珠庵の住僧　元祿十四年（一三八二）寂、年六十二

荷田春滿　國學者

いへる歌にたじろぐ雲といへるは、いと面白し。似而非歌人はかかる言葉のはたらきあるはたらきよりは、猶ほ古き言葉のあたひなきあたひを尊むべきものと思へるなるべし。言葉のやすらかなるは極めてよし。言葉のしかと實際に協ひたるは、よきなり。

七夕雲雀（近世の和歌）

僧契沖

夕雲雀芝生に落ちて聲やめば
　山よりのぼる春の夜の月

荷田春滿

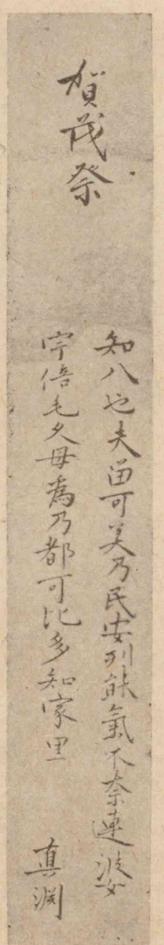
初瀨のや里のうなゐに宿とへば
　かすめる梅の立枝をぞさす

山城稻荷神社の祠官　元文元年（一三九六）歿、年六十九

賀茂眞淵　國學者　遠州濱松の人　明和六年（一四二九）歿、年七十三

賀茂祭　ちはやぶる神のみあれの今日なればうべも雲井の使立ちけり　眞淵

本居宣長　國學者　賀茂眞淵の門人　伊勢松坂の人　享和元年（一四六一）歿、年七十二



ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の
　あとを見るのみ人の道かは

賀茂眞淵

うららうらとのどけき春の心より
　にほひ出でたる山櫻花

本居宣長

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷲の
　つばさもたわに吹くあらしかな

軒くらき春の雨夜のあまそそぎ
　あまたも落ちぬ音のさびしさ

田安宗武　國學者、將軍吉宗の第二子、贈權大納言、明和八年（一七七一）歿、年五十七

言の葉は人の心の聲なれば思ひを述ぶる外なかりけり

思ふことといはでやまめや心なき草木も風に聲たてつなり

古にかへらんことは皆人のもとの心の道の一筋

蘆庵

加藤千蔭　國學者、江戸の人、文化五年（一八〇八）歿、年七十四

村田春海　國學者、江戸の人、文化八年（一八一一）歿、年六十六

小澤蘆庵　歌人、尾張の人、享和元年（一八〇一）歿、年七十九

小澤蘆庵筆蹟

里遠みたどる末野のゆふぐれに
しるべうれしく立つ煙かな

田安宗武

わが宿のそがひにたてるかしの木に
かし鳥來なく頃ははや來ぬ

加藤千蔭

墨田川みの着てくだす筏士に
霞むあしたの雨をこそ知れ

村田春海

見し世にはただなほざりの一言も
思ひ出づればなつかしきかな

小澤蘆庵

惜しからぬ命ながらも足乳根の

上田秋成　國學者、小說家、大阪の人、文化六年（一八〇九）歿、年七十八（圖は貝寬の自畫像と歌）

世の中にまじらぬとにはあらねどもひとり遊びぞわれはまされる

加納諸平　國學者、安政四年（一八五七）歿、年五十二

良寬　歌僧、俗名山本榮藏、越後出雲崎の人、天保二年（一八三一）寂、年七十四

貝寬自畫像

ある世はかくてあるよしもがな
碎けちる氷と見えて水鳥の

上田秋成

羽風にさわぐ池の月かげ

霙ふり夜のふけゆけば有馬山
出湯の室に人の音もせぬ

加納諸平

雲かかるわたのみ中にあら潮を
雨とふらせて鯨うかべり

良寬

むらぎもの心たのしも春の日に
鳥のむらがり遊ぶを見れば
月よみの光を待ちてかへりませ

香川景樹
歌人
號は桂園
鳥取の人
天保十四年（一三）
三歿、年七十六

河上花　大井河
かへらぬ水に影
みえてことしも
咲ける山ざくら
かな　景樹

橘曙覽
歌人
越前福井の人
明治元年（一三六）
歿、年五十七

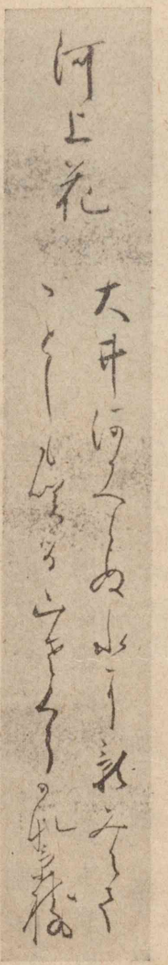
山路は栗のいがの多きに

香川景樹

うづみ火の外に心はなけれども
むかへば見ゆる白鳥の山

歸るべく夜は更けたれど鴨川の
瀬の音は清し月はさやけし

橘曙覽



景樹筆蹟

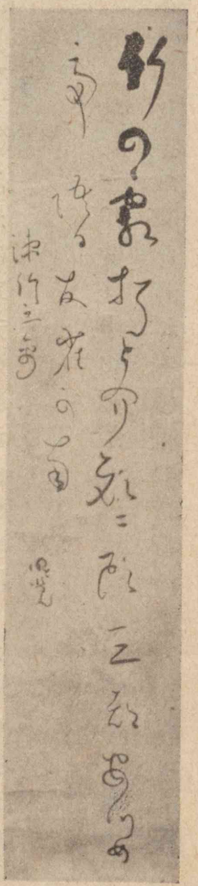
蟻と蟻うなづきあひて何かこと
ありげにはしる西へ東へ

樂しみは珍しき書人にかり

竹の霜うちとけ
顔に頭三つあつ
めてかたる友雀
かな
疎竹三禽　曙覽

大隈言道
歌人
姓は清原
筑前福岡の人
明治元年（一三六）
歿、年七十一

はじめ一ひらひろげたる時



曙覽筆蹟

大隈言道

こたへする聲おもしろみ山彦を
限りもなしによぶ童かな

太田垣蓮月
女流歌人
名は誠（のぶ）
明治八年（一三五）
歿、年八十五

親なければ子さへ泣くなり世の中の
せんすべなさも何も知らずて

太田垣蓮月

はらはらと落つる木の葉に交り來て
栗の實ひとつ土に聲あり

八　本居翁の遺蹟

芳賀矢一

薄寒い朝風に面を吹かせながら、野山の景色を眺めゆく樂しさ。見わたせば早稻田はすでに刈り盡くされたが、晩稻田は金色に波立つて、美しく豐年の喜を見せてゐる。尾花や野菊の交つてゐる疎らな小松原を通つてしばらく行くと、喬松の亭々と聳えた山の麓にさしかゝつた。それから、あの山は何、この山は何と、車夫の語るのを聞きながら進むうちに、「あれ、あそこの山の茂みが、お墓でござります。」と、俄かに車夫の詞が改つて、間もなく山室山の麓に着いた。

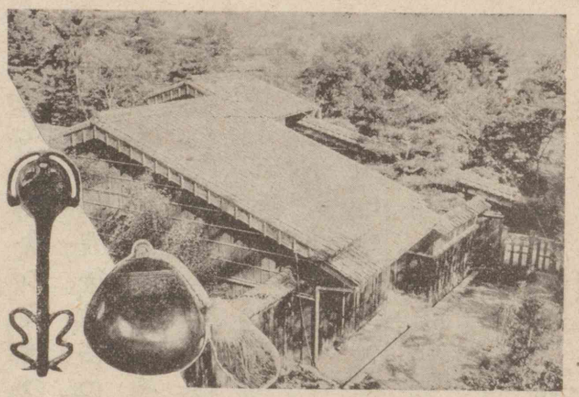
車を捨てて爪先上りの坂道を上つて行く。翠の滴るやうな木々の茂り、その間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には、いかにも清らかで珍しい。その杉、松、椎などが茂り合つた小暗い道を凡

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
昭和二年（一九二七）歿、年六十一

疎らな小松原。
喬松の亭々と聳えた山の麓にさしかゝつた。
山室山
三重縣飯南郡花岡村。
翠の滴るやうな木々の茂り、その間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には、いかにも清らかで珍しい。

四五町
一町は約百九メートル。
九十九折を喘ぎ喘ぎ上る。
二三十坪。
一坪は約三・三センチアール。

平田篤胤
國學者、宣長の門人。秋田の人。天保十四年（一八四三）歿、年六十八。



宣長の舊宅と遺愛の鈴

そ四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には特に深い關係のある寺である。

それから右へ左へと、九十九折を喘ぎ喘ぎ六七町も上ると、古い木の鳥居が立つてゐて、十數段の石磴の上に、二三十坪ばかりの平地がある。その中央の小高い盛土が卽ち翁の墓である。上には櫻の木が一本植ゑられて、その前に

本居宣長之奥墓

と題した墓石が建つてゐる。墓の左手には圓い石が一基、平田篤胤大人の、

なきがらはいづくの土になりぬとも

魂はおきなの許に行かなん

と刻んだのが建つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことはなかつたが、翁の歿後、數多の門弟子のある中で、大人ひとり翁の傍に侍つて居られるのは、さぞかし滿足なことであらう。この墓所は、もと、かの妙樂寺の所有地であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。翁がその承諾を喜んで、住僧に宛てられた禮狀は、今もなほ同寺に珍藏してあるが、

山室の山に千年のやどしめて
　かぜに知られぬ花をこそ見め

といふ翁の歌は、この時の悦を述べられたのであつた。二十年來一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量である。

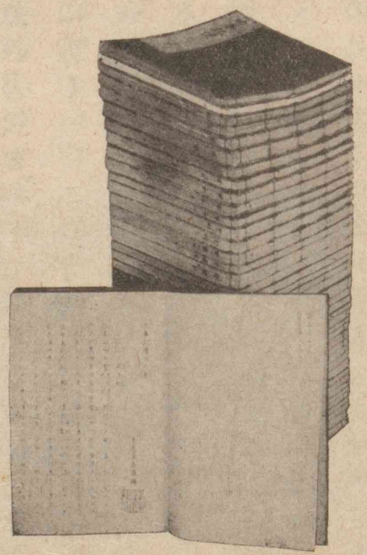
占定。

今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量である。

ももとせの世は隔つれど教へ子に
　數まへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は、幾百萬の多きに上つてゐるであらう。そしてその著書の卓絶した學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝある。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

この墓所は山の頂にあつて、眺望の美しさは比類がない。近くは松坂の町を眼下に見て、遠くは青々とした伊勢の海から志摩、三河、尾張等の崎々、山々を見はるかし、のみならず遙か彼方には富士も見えるといふことで、



宣長著古事記傳四十四冊原本

その著書の卓絶した學術上の價値と、偉大な感化力。

歿後の門人。

松坂の町　三重縣飯南郡。津市の南方約十九キロ。

千古に卓越した偉大な學者。

そゞろに人をして襟を正さしめる。

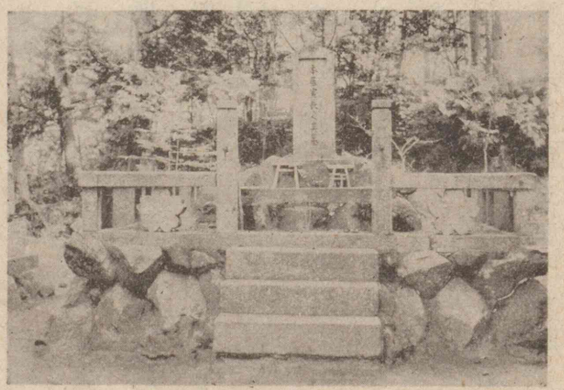
「晴にはちやうどあのあたりに。」

と、案内の人が指さして教へてくれた。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜して、參拜名簿に名を記した。こゝの眺望もまた誠に美しい。この寺は元來翁の祖先の檀那寺で、翁が折々遊びに來られる中に、深き好みを寄せられるやうになつたといふことである。

松坂へ歸つて、城址の公園に行つた。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝに保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛の品々、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學はそゞろに人をして襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中では火災のおそれがあるといふところから、保存會の計らひで、この舊城址の一角に移したのであつた。場所は變つたが、家や屋敷はもとより、庭の樹木、置石の取合はせまで、悉く舊態を存するやうに苦心したといふことで、臺所の竈も、井戸も、便所も、すべてが翁在世の折のそのまゝになつてゐるのである。

こゝから日本全國を吹き靡かし



本居宣長の墓

さて、下が抽出になつてゐる例の小さい階段を上ると、二階が四疊半の書齋で、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸かつてゐる。但しこれは摸造品で、實物は陳列庫に藏められてあるが、この四疊半が卽ち翁の一切の著書の述作せられた所で、こゝから日本全國

を吹き靡かした古學の風が舞ひ起つたのである。窓は西向についてゐて、それからさしこむ夕日は、さぞ堪へ難かつたであらうと思はれるが、この質素な家居の樣がいよ〳〵翁の人格を大ならしめてゐる。私はドイツのワイマールで、ゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の狀態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟に對しては、一層その思ひを深うした。またゲーテ、シルレルの舊宅を見た時には、日本でもかういふ風に、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが目のあたり實行されるやうになつて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのは實に悦ばしいことである。

この公園は四望豁然恰もパノラマを見るやうで、もとより絶景ではあるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高なる威嚴を加へた趣がある。我が國に翁のあるのは、我が國の誇である。また松坂町民の誇として、翁の遺蹟に越したものはない。

城の大手門を出でて數十步、縣社山室山神社がある。翁を祭つた社で、社殿、瑞籬が神宮風の樣式であるのは、ひとしほ嬉しかつた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲してゐるのを見るのは、殊に嬉しかつた。

さくら木にゑりし百千の卷卷ぞ
風に知られぬ花にはありける

た古學の風が舞ひ起つたのである。

ワイマール　ドイツの一都會。

ゲーテ　(1749—1832)　ドイツの詩人。ダンテ、シエークスピヤと共に世界三詩人の一人。

シルレル　(1759—1805)　ゲーテと並び稱せられたドイツの詩人。

本居宣長
前出（四三頁）
玉かつま
宣長の隨筆集

九玉かつま抄

本居宣長

近き世、學問の道開けて、大かたよろづのとりまかなひ、さとく賢くなりぬるから、とり〴〵に新たなる說を出す人多く、その說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、未だよくもとゝのはぬ程より、我劣らじと、よに異なる珍しき說を出して、人の耳を驚かす事、今の世の習なり。その中には隨分によろしき事も稀には出で來めれど、大かたいまだしき學者の、心はやりて言ひ出づる事はたゞ、人にまさらむ、勝たむの心にて、輕々しくまへしりへをも考へ合さず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなかなかなるいみじきひがごとのみなり。

來めれど

なか〳〵なる

すべて新たなる說を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ

かへさひ思ふ

思ひて、よく確かなるよりどころをとらへ、いづくまでも行き通りて、違ふところなく、動くまじきにあらずば、出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、程經て後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

うけばり

なほ

本居宣長肖像

すべてものを書くは、事の意を示さむとてなれば、おふな〳〵文字さだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなる事とも讀みがたきが世に多かる、あぢきなきわざなり。常に書き交す消息文などは、文字讀みがたくては言ひ遣るすぢ行き通らず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝ

おふな〳〵

かへさひ讀めども、終に讀み得ずなどしては、こゝ讀みがたしと返し問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては事たがひもするぞかし。

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、殊に手あしくては、心劣りのせらるゝを、それ何かは苦しからむと言ふも、一わたりことわりはさる事ながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

ことわり　心地ぞ　するや

よさま

おのが、師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知るごなし。師の説なりとして、わろきを知りながらいはず、つつみかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむことを思ひ、古のことの明らかならむことをむねと思ふがゆゑに、わたくしに師を尊むことわりの缺けむことをばえしも願みざることあるを、なほわろしと譏らむ人は譏りてよ。そはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を、尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

えしも　えせずなむ　あるべくや

須賀直見　伊勢松坂の人　宣長の門人。

須賀直見がいひしは、「廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ處も多かるを、經行きては又面白く目覺むる心地する浦山にも到るなり。又、足強き人は早く、弱きは行くこと遲きも、よく似たり。」とぞいひける。

譬なりかし

をかしき、譬なりかし。

一〇　生花我觀

西川一草亭

日本の生花に取つて第一の命ともいふべきは枝振を生かすことである。この枝振が善いか悪いか、それから枝の布置配合が面白いか面白くないか、これがあらゆる生花の高下優劣を判斷する最高の標準で、この點に於ては抛入も立花も更に違ふところがない。

枝振にはリズムがある。そしてそれを見る人に音樂的な快感を與へ、同時に日本畫の筆勢を味はせる。これは西洋の草花には殆どないことで、もと〳〵日本人の自然に對する趣味の教養から來たことであり、殊に日本畫の影響から來た結果であるが、これと共に見逃すことの出來ないのは日本の植物が天性曲折に富んでゐることで、もしあの二三尺の小枝までが、變化に富んだ風流な姿態を見せて、我々に花道の極意の暗示を與へることがなかつたならば、またもし日本の植物が、西洋の植物に見るやうに、ヒマラヤ杉やポプラのやうな物ばかりであつたならば、いくら日本人でもあの生花のやうな特殊藝術を思ひつくことは出來なかつたであらう。

アメリカ人で花の稽古を始めた某の夫人が、「せつかく花を習つても、私の國には日本のやうな面白い枝振の木がありません。いくら花菖蒲や百合の類はあつても、木物がなくては駄目ですからね。」と言つて、稽古を中止してしまつたといふが、さもあるべきことである。

日本には到る所に枝振の好い木がある。尤もこれについては、國が小さいので、木までが小さく島國的にこぢれてゐると言つて

西川一草亭
去風流瓶華家元
京都の人
昭和十三年歿
年六十一

リズム
節奏。

趣味の教養
見逃すことの出來ないのは日本の植物が天性曲折に富んでゐることである。

特殊藝術

島國的にこぢれてゐる。

非難する人もあるが、とにかくそのこぢれたところを生かして、獨自の藝術を工夫したところに面白味があるので、これは生花のみならず庭園や盆栽に就いても、同樣の事がいへるのである。

獨自の藝術。

枝振からいふと、梅の如きは生花に最も適當した材料であらう。

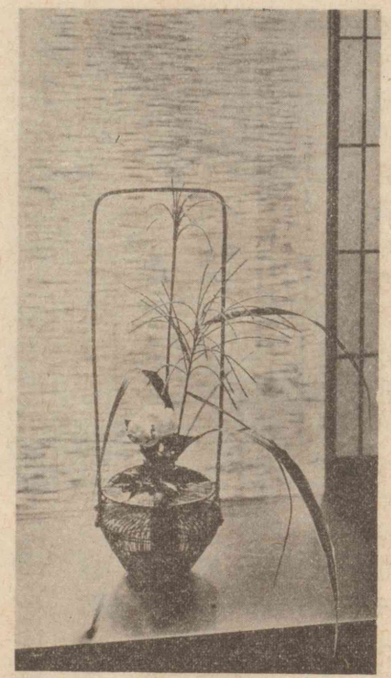
枝振からいふと、梅の如きは生花に最も適當した材料であらう。梅は花や匂もよいが、その東洋人に喜ばれるのは、主として木振、枝振の妙趣にある。枯れ切つた書や畫でも見るやうな、その一種特別な風致にある。梅には木に精神があるといはれるのは、かういふ點を指すのであらう。

草花には木に見るやうな面白い枝振の物が少い。

草花には木に見るやうな面白い枝振の物が少い。殊に牡丹芍藥のやうな、花の見事な物ほど、この方の面白味を缺いてゐるのが常で、さういふ花を生かすために工夫するのが花の取合はせである。例へば牡丹に木蓮を添へ、燕子花に柳をあしらふといふのがそれで、花が美しくて線の變化に乏しい物に、木振の面白い物を添へて、その單調の弊を救ふのが主眼である。

單調の弊を救ふ。

この取合はせの事を支那の文人は「使令」と稱し、これを召使に比較して、牡丹は玫瑰や薔薇を婢とし、芍藥は罌粟や蜀葵を婢とするなどと言つてゐるが、しかしながら、牡丹に薔薇を添へ、芍藥に罌粟をあしらふ類は、取合はせとして、實は極めて劣等なものである。



瀧に木槿（筆者挿花）

これは支那人の趣味が日本人の淡泊なのと違つて一體に濃厚なところから來たので、恰も鯛の後に鰻を出すやうなものである。日本人の趣味からいふと、取合はせの極意は、一方の短を補ふか、或

輕快清楚

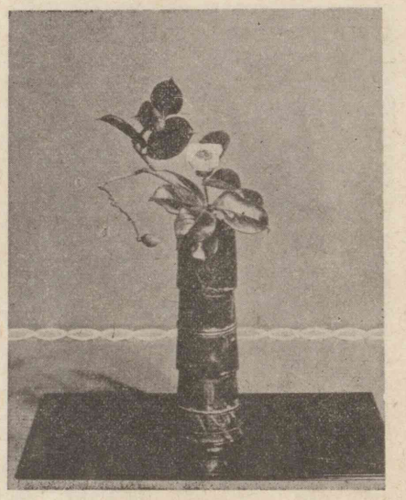
生花を研究する人は、暇があれば、郊外に出て、花木のもつ自然のまゝの有様を研究しておくべきである。

調子はづれの不自然なところ。

はそれと對照の美をなすにあるので、例へば牡丹が主ならば竹をあしらつて、前者の重々しい感じと後者の輕快清楚な趣とを併觀するのが、變化兼統一の大趣味を成就する極意なのである。

生花を研究する人は、花や木を生ける技術を練るばかりでなく、暇があれば、郊外に出て、花木のもつ自然のまゝの有様を研究しておくべきである。私はよく東京京都間を往復するが、汽車が箱根や關ケ原の山間を走る時は、いつも窓外に目を放つて野生の花の姿やその周圍に見える自然の取合はせを觀察する。秋は龍膽やをみなへしや、藤袴、草藤などが薄の中に交つて咲き亂れてゐる。夏は、薊、百合、萱草などが、野茨や、わらびや、ぜんまいの中に、一莖、二莖、或は五六莖とかたまつて咲いてゐる。さうしてそれがいかにも自然で、生花にしば〳〵見るやうな、また花壇の花によく見るやうな、調子はづれの不自然なところが更にない。生花はやはり、かやうな草木の自然の生態を參考して、雜草などを取合はせつゝ、大自然の中に咲いてゐる通りの趣を示すべきである。

西洋の花。



白椿（筆者挿花）

西洋の花についても同じ事がいへるわけで、西洋花を生けるには、やはり西洋の郊外を親しく觀察する必要があるであらう。私にはその聯想がないために、西洋花には裝飾以上の趣を感ずることが出來ない。西洋花はたゞ美しいばかりで、日本の花ほど深い趣味をもつてゐないといふ人が多いのも、一つはこの背景に對する聯想が伴なはないからであらう。

生花に命を與へるコツは花木それ〴〵の箇性を知つて、無理の

ない取扱をすることである。近衞家熙公の『槐記』に、かういふ一節がある。

御うしろに一重の御筒に白玉椿と緋木瓜の入つてありし、木瓜の枝元に花の蕾多く、梢は花もなく、一屈り曲りたる枝のところを指して、「こゝより切つて捨つべかりしを、そのまゝにおかるゝにて木瓜なり。先の曲りを斷たるなれば梅の枝になる。この味はひよく合點すべし。」と仰せらる。

この話の趣意は、花にはそれ〴〵の箇性があるから、それをよく考へて、木瓜が梅に見えたり、梅が櫻に見えたりしないやうに心掛けることが肝要だといふのである。自然をよく見て居れば誰にも氣のつく筈のことであるが、この箇性の有無について、私は曾て面白い經驗をしたことがある。

花を生ける人がよく、「枝が自由になるものならば、生花もさまで

近衞家熙（このえいへひろ）　基熙の子、母は常子内親王。太政大臣に上る。典籍儀禮に通じ書畫茶道を能くした。元文元年（一七三六）薨、年七十。『槐記』は門弟山科道安の筆記にかゝる。

花にはそれ〴〵の箇性がある。

或時造花の薔薇を生けてみて、自分の考の間違であることを知つた。

むづかしいものではないが、思ふやうにならないから困る。造花のやうに針金でも入れて撓め易くしておいたら樂だらう。などといふ。成程さうかも知れない、尤もな言ひ分だと、私も久しく思つてゐたが、或時知人に賴まれ、造花の薔薇を生けてみて、自分の考の間違であることを知つた。

薔薇

その花といふのは、近く洋行される高貴の御方に獻上して船中の御徒然をお慰め申す料であつたが、造花の形のまゝでは趣がないから、拋入風に生けてくれろといふ依賴であつた。私は無造作に引受けて、籠花入に生けたが、さてやつて見ると、生きた花とは違つて、枝に一々針金が通つてゐるから、面白いほど自由にな

る。これは本物の花より遙かに生けやすいと思つたが、段々やつて見ると案外で、その生けにくさといつたら、なかつた。

どうして生けにくいか。本物の生きた花にはそれ〴〵の箇性がある。いくら素直な枝でも、よく見ればやはりその枝〳〵の癖があつて、生けて行くうちに、それ〴〵自然に持前の美を現して來る。ところが造花には何等の箇性もない。それを生けるのはちやうど魂のない人間を教育するやうなもので、どう手をつけてよいか、全く見當がつかないのである。それも、流儀花のやうに一定の型があつて、その型にあてはめて生けるのであれば、それでまだやりやすいが、抛入には型がなく、自然の枝振に應じて適宜の處置を取るのが要領なので、その形は人間が案出するのでなくて、花の方から與へてくれるのである。

ところが造花には箇性がなく、癖もなく、生まれつきの心がない

造花には何等の箇性もない。それを生けるのはちやうど魂のない人間を教育するやうなもので、どう手をつけてよいか全く見當がつかない。

から、自らその特色を發揮して本性の美を表現しようとする力がない。隨つていくら工夫をして生けてみても、博物の標本同樣に、どこまでも死物で、活き〳〵した趣が更に出て來ないのであつた。

私はこの時の經驗によつて、一直線に生花の極意に悟入したやうな氣がしたのである。

（『茶心花語』に據る。）

吉田絃二郎　小說家、文學者　本名は源次郎　佐賀の人　明治十九年生

常套的な構圖。

一一　童心童眼

吉田絃二郎

人間といふ自分自身の姿、自分の心の姿を靜かに見つめるといふことは、我々の生活に取つて最も大切なことである。大抵の人人は、日々夜々のはげしい勤のために、自分自身の心の姿を見つめる機會を餘り持ち得ないやうである。またそのやうな機會を持たうと心がけてもゐないやうである。

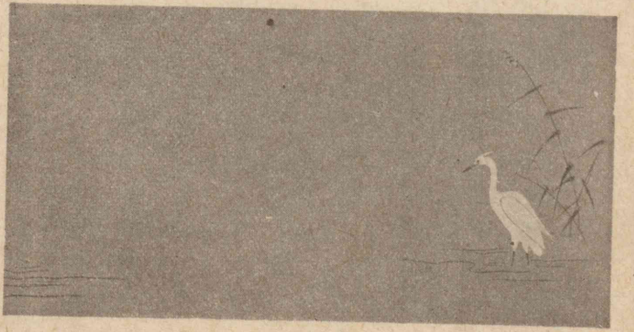
今日では殆ど繪の上の常套的な構圖になつてゐるが、古い傑れ

何もない空無の世界の眞中に、たゞ一羽の白鷺が、じつと水の上の一點を凝視してゐる。

我々箇々の人間は、一つの考へるところの存在

だ作品の中に、よく一羽の白鷺が水のほとりにつくねんと佇んで自分の姿を水に映して眺め入つてゐるのがある。これは繪畫上の單なる構圖としても、面白い古雅な味のある形である。限りもなく廣い靜かな水の上には、何一つ目を遮るものもない。そこには何もない空無の世界のみが廣がつてゐる。その何もない空無の世界の眞中に、たゞ一羽の白鷺がじつと水の上の一點を凝視してゐる。絶對無の境に置かれた、たゞ考ふるところの一つの存在である。

かう考へて來ると、一羽の白鷺の圖も、なかなか味のある聯想を與へてくれる。我々箇々の人間は、一つの



一羽の白鷺

である。絶對無の境に置かれた一羽の白鷺である。

藝術なり、哲學なりを味はふといふのも、畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいがためである。

我々の心には形がない。けれど

考へるところの存在である。絶對無の境に置かれた一羽の白鷺である。あのたゞ一羽の白鷺が池のほとりに佇んでゐる姿に尊い味があると同樣に、たゞ一人靜かに自分の心を見つめてゐる人人の生活にも尊い味がある。

歌を詠むこと、俳諧を樂しむこと、繪を描き音樂を聽くこと、そのほかすべて藝術なり、哲學なりを味はふといふのも、畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいがためである。

例へば、一叢の蘭の葉を描くとする。墨の濃淡、筆の勢にも、その刹那の自分自身の心の姿が表れて來る。お茶を立てるとする。一碗の茶の味にも自分の心の影がはつきりと映つて來る。ピアノの前に腰を卸して鍵を打つ。たゞ一つの音階にも、自分の心臟の脈搏が傳はつて來るのである。

我々の心には形がない。けれども心の內のひらめきは、いろい

も心の内のひらめきは、いろいろな形となつて外部に現れて來る。

ベートーゼン（1770―1827）ドイツの音樂家

ショパン（1810―1849）ポーランドの作曲家

近松門左衞門　元祿時代の有名な淨瑠璃作家、實名杉森信盛。享保九年（一三二四）歿、七十二。

シエークスピヤ（1564―1616）イギリスの劇作家。

ろな形となつて外部に現れて來る。その外部に現れて來たいろいろの尊い形を通して、我々は人間の心の尊さ、深さ、有難さを想像することが出來る。ベートーゼンやショパンの音樂を聽く時に、或は近松門左衞門やシエークスピヤの作品を讀む時に、我々はどうしても人間の心の深さについて、嚴肅さについて、高さについて、或は寂しさについて考へざるを得ない。そこには我々自身の心の姿の深さも、嚴肅さも、あはれさも、尊さも、そのまゝに映し出されてゐる。

人間が生きてゐる意義を、人類全體の幸福のためとか、神の攝理のためとか、かういふ風にきめてしまふ人がある。或はさうであるかも知れない。もしそれで滿足できる人は、それで滿足するのもよい。けれどもかやうな人生の見方は、やゝもすれば餘りに大ざつぱな摑み方に墮ち易い。それは餘りに疎雜で賴りどころのない感じがする。偉大な人、偉大な宗教家といふやうな人には、そのやうな悟も出來るであらうが、凡夫下根の身には、そのやうな悟はなか〳〵出來さうもない。釋迦のやうなえらい人でも、發菩提心の原因は病老死苦の歎であつた。病老死苦の歎はつまり我々凡夫下根の歎そのものである。何故に人は病み、老い、死するかといふ歎は、我々を驅つて靜かに人間の運命について考へさせる。人間の心の姿を見つめさせようとする。釋迦の結跏趺坐の苦行は、要するに我々が靜かに自分の心の姿を見つめようとする努力に過ぎない。我々は山にこそ入らざれ、日々夜々人間の病について、老について、死ぬことについて考へ、恐れ、をのゝきつゝあるのである。

凡夫下根の身。
發菩提心。
病老死苦。
結跏趺坐。

この老を悲しみ、病を恐れ、死を恐れる心、これが人間の自然の心である。もし老も病も死も恐れないなどといふ人があるとすれ

心が堅い殻に包まれてしまつてゐる。

ば、それは嘘である。私は平氣でそのやうな事をいふやうな人の宗教や修養法を輕蔑する。恐れるが故に生について考へる、死について考へる、人間の運命を、人間の心の姿を見つめようとする、菩提の光を求めようとするのである。無理に自分の心をかたくなにして、病も恐れない、死も恐れないといふのは、すでに心が堅い殻に包まれてしまつてゐるのである。死を恐れ悲しむがゆゑに、我我は生きてゐる現在の有難さを心行くまで味ひたいと思ふのである。

我々は一文の値をも拂ふことなくして生れて來た。しかも我我はそこに値ぶみすることのできないほど尊い人間の心を惠まれて來た。また一文の値を拂ふことなしに、太陽を惠まれ、微風を、鳥の聲を、雲の色を、青空を惠まれてゐる。

生きてゐる間に、我々は自然によつて惠まれた太陽と、青空と、微風と、鳥の聲と、波の音と、夕燒の色とを、貪りつくす程の心で味はつて見たい。西行といひ、芭蕉といひ、一生を家もなく送つたのはそのためではなかつたか。

かれらは家をも土地をも持たなかつた。しかし吉野山の櫻も、石山の月も、鳴立澤も、象潟の合歡の花も、日本國中の山も川も、皆彼等のものであつた。すべてのものを捨てて天地といふものの懷に一身を委ねてしまつたからである。

我々は芭蕉や西行のやうに家を捨てて自分ひとりで歩いてゐるわけには行かないかも知れぬ。しかしその心持だけは眞似てみたい。殊に目まぐるしい近代の都會生活を送つてゐる人々にあつては、一層この心掛が必要なことであると思ふ。

七八年以前のことであつた。私は大井の奥に友人を訪ねた。五月頃で、さんざしの花が咲き、麥の穗が丘を埋めてゐた。その時

西行　前出（三一頁）

芭蕉　德川時代の俳聖。本名松尾宗房。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

鳴立澤　相模國大磯の西方。

象潟　羽後國由利郡象潟町の附近に古址がある。

大井　東京市品川區大井町。

その時ふと、秋の時雨でも聽くやうな靜かな音をして、雨がさつと降つて來た。

一滴の露の落ちてゆく音にも、一枚の木の葉の散つて行く聲にも、氣をつけてゐなければ、神の跫音を聽くことは出來ない。

ふと、秋の時雨でも聽くやうな靜かな音をして、雨がさつと降つて來た。私はその時、一枚々々の葉の面を打つて行く雨の音を聽いた。何といふ靜かな、ものわびしい音であらう。たしかに私は十年以上もその雨の音を忘れてゐたのであつた。我々のあわただしい都會生活は、この靜かに木の葉の上に落ちてゆく雨の音を聽くことをすら忘れさせてしまつたのである。

我々の魂の上には二重にも三重にも堅い殼が被せられてしまつてゐる。よほど強い人工的の刺戟でなければ、大抵の場合に感ずることが出來なくなつてゐる。けれども神は靜かなるところに來るといつた哲人があるやうに、神が我々に近づく時は、極めて低い靜かな跫音でやつて來る。餘程心の面を平靜に保つて、一滴の露の落ちてゆく音にも、一枚の木の葉の散つて行く聲にも、氣をつけてゐなければ、神の跫音を聽くことは出來ない。

一葉落ちて云々
一葉落チテ天地ノ秋ヲ知ル。（李　白）

我々は出來るだけ沈默を守つてゐたい、そしてもつと〳〵親切な眼で、人生を、自然を見たい。

夜明け方の湖の面を見つめてゐると、さゞ波一つ立ててはゐない。あの夜明の湖水の心が必要であらう。夜明の湖水は波一つ立ててゐないゆゑに、東雲の美しい雲の色をもうつし、目に見えぬ微風の姿をも現ずることが出來るのである。一葉落ちて天下の秋を知るといふが、一枚の木の葉の落ちる音にも、一片の花びらの落ちるひゞきにも、もし心をすまして聽いてゐるならば、神の聲がある筈である。

饒舌な人と半時語つてゐるのは、隨分つらい、そして何の得るところもない。けれども緣日で買つて來た廉い一鉢の花とならば、一日對坐してゐても飽きることがなく、そして何ともいへぬ心の悅を見出だす。芭蕉は俳談の他談ずべからずといつた。我々は出來るだけ沈默を守つてゐたい、そしてもつと〳〵親切な眼で、人生を、自然を觀たいと思ふ。おしやべりをしてゐる間は、心が眠つ

てゐるのである。

私はこの頃、庭の山茶花が疲れて來たのを見て、人に賴んで、郊外の麥畑へ植ゑかへた。さて植ゑかへた所へ行つて見ると、驚くではないか、その幹も葉も眞黑になつてゐる。今まで庭前に置いてある間は、山茶花の幹が、自然の色を失つてゐることに氣づかなかつたのである。我々都會生活者の心もまたこの山茶花のやうに煤に汚されてゐるのではないか。我々の嗜好や趣味もまた、この山茶花のやうに不健全になつてゐるのではないか。

童心童眼　（石橋和訓筆）

田舍に住んでゐる少年達は、山の水のうまさ、土の香のなつかしさを知つてゐる。

田舍に住んでゐる少年達は、山の水のうまさを知つてゐる。土の香のなつかしさを知つてゐる。我々は都會に住んでゐるがために、人工的のいろ〳〵な刺戟は知つてゐるが、山の水のうまさをも、土の香のなつかしさをも、山の空氣の感觸をも忘れてしまつてゐる。不具の生活を生きてゐるがゆゑに、不具の刺戟をもとめてゐるのである。

私は庭に雀のお宿を拵へてやつてゐるが、今ちやうど子雀が巢立つたところなので、その子雀が毎日米をたべに集つて來る。ところが、大きな雀は人を疑つて二三粒たべては直ぐに飛んで行くので、大きな雀だけゐるうちは、一向米が減らなかつたが、子雀はまだ人を疑ふことを知らず、笊の中へ四五羽づつ這入りきりになつてたべてゐるので、彼等が來るやうになつてから米の減りかたが著しく目立つて來た。私はこの子雀の何ものをも疑ふことを知

信じなければならぬものを信ずることが一番大事である。

らないのを見てゐると、實にいゝ氣持になるのである。

我々の世界でも、かつてはこの小雀のやうな時代があつた筈である。あゝいふ世界が、どうかして我々の世界にも取戻されなければならぬ。童のやうに悲しいことを悲しみ、嬉しいことを嬉しがり、腹立たしいことを憤る人間が一番尊いのである。信じなければならぬものを信ずることが一番大事である。そして我々はこの心を一番多く失つてゐるのである。

童の素直な心で、人を思ひ、童の素直な眼で物を見るといふことが、藝術にも、すべての人事にも、一番大切であると、私は思ふ。

（『わが詩わが旅』に據る。）

正宗白鳥
小説家、評論家
名は忠夫
岡山縣の人
明治十二年生

湘南
湘は支那湖南省の洞庭湖に注ぐ名河の名。それを神奈川縣の相模川の美稱に用ゐ、その南方相模灣に臨む海岸一帶の地を湘南と呼ぶのである。

一二　ピアノ物語

正宗白鳥

今年二十になるまつ子は、湘南に轉地してゐる伯父の東喜久雄の家に寄寓してゐた。彼女は關西の田舍に生まれて、東京を今度始めて見たのであつたが、塵埃や煤煙で濁らされたゴミ〳〵した都會には、さして心も惹かれなかつた。演劇や琴の會へ連れて行かれても、さほど感動はしなかつた。

彼女はたゞピアノを習ひたかつた。といつても、それは、田舍の小都會の知人の家で二三度教はつたために、この西洋音樂を好むやうになつただけで、專門に研究したいなんていふ欲望が起つたのではない。たゞピアノを鳴らしさへすればいゝのであつた。

それで、伯母のとく子は、まつ子にピアノを教へてくれさうなところを捜さうと心がけてゐたが、或日知合の小學校の校長の細君

に會つて世間話をしてゐるうちに、ふと小學校にピアノが備へつけられてあることを思ひ出して、「小學校の音樂の先生は、教へて下さらないでせうか。」と訊ねた。「よろしいでせう。訊いて上げませう。」と校長の細君は答へた。

間もなく細君はとく子を訪ねて來て、「一週に二度ぐらゐはお教へしてもよろしいさうです。」と言つてくれたので、まつ子はその日から學校へ出かけて行つた。若い先生は親切に教へた上に、「明日もいらつしやい。」とお世辭を言つた。まつ子はその言葉に甘えて、翌日から毎日朝のうちに髪を結つて、お化粧を凝らして、午後になると出かけて、それを何よりもの樂しみにしだした。教師はちよつとしか教へてくれなかつたが、電氣の點く頃まで自分一人で練習をするやうになつた。

「他の人は彈きに來ないのかね。」と伯父が訊くと、

お世辭を言つた。言葉に甘えて。

「誰も來ません。」とまつ子は答へたが、しかし、いろ〳〵な先生が、部屋を覗いてはいやな顏をすると、彼女は言つてゐた。

それはどういふわけだらうかと、伯父夫婦は考へてゐた。「さう一人でピアノを使つてゐてもいゝものか、校長さんの奥さんに訊ねて見よう。」と伯母のとく子は言つてゐたが、そのうちに二三週間は過ぎた。

或日通りがかりに、とく子は校長の家へ寄つて、細君に會つて、その事を言ふと、細君は、待つてゐたと言はぬばかりに、

「ピアノには困りました。毎日いらつしやつて、ずん〳〵お使ひになるので、大勢の教師が練習が出來なくなつて、みんなが不平を言つてゐるさうです。校長が學校に關係のない人に樂器を貸すのは不都合だと申してゐるさうです。わたくしも主人から叱られました。」と憤慨を洩らした。

待つてゐたと言はぬばかりに。

とく子はしまつた事をしたと、始めて氣がついて、

「あゝいふ子供ですから、つい氣がつかず、皆さんにとんだ御迷惑をかけて濟みませんでしたわね。」

「一月ぐらゐといふことでしたから、そのうち、お止めになるだらうと思つて默つてゐたのですけれど、小使の主婦なども、口が惡いから、蔭ではいろんな事を申してゐるんですよ。權柄づくで上草履を貸せなんておつしやつて、あの人はどういふ人だらうつて……ピアノは一日貸しても貳拾圓もお禮を下さる方があるんですよ。」

權柄づくで上草履を貸せなんておつしやつて。

面皮を剝がれる思がした。

さう言はれると、とく子は面皮を剝がれる思がした。とく子の家では、學校へ何等の寄付もしてゐないし、學校のために寸毫も盡くしてゐるのではなかつた。で、とく子は家へ歸ると、夫に向つて早速その話をした。夫は豫想した事を確かめたやうに感じた。

目顏で知らせたりしないで。

「ぢや、遠慮しないで早くさう言つてくれればよかつた。當人が田舍の子供で氣が利かんのだから、目顏で知らせたりしないで、露骨に、さう長く使つちやいけないと斷つてくれればよかつたのだ。おれはそんな事で小學校に恩を着るのはいやだよ。ピアノを習ふのなら、教授の看板を掛けてゐる所へ月謝を拂つて行けばいゝ。他人の御親切に甘えると、お互にいやな事が出來るものだ。」

「當人もあんまり非常識だから。」

とく子は、自分の方から好意で世話をしたのに、こんな事になつちや、せつかく樂しみにしてゐるまつ子に失望させて、むしろ恨まれる事になるだらうと神經を惱ました。

まつ子は翌日からピアノの稽古を中止しなければならなかつた。そして、兩親がピアノさへ買つてくれれば淋しい田舍へ歸つ

て暮してもいゝと、當てにならない事を望んでゐた。

「かういふ事が世の中の修業の一つだ。意氣込んでゐた鼻の先を折られたのだが、生きてゐるうちには、このさき何度こんな目に出會ふか、分らないんだぜ。」と伯父は言つた。

意氣込んでゐた鼻の先を折られた。

一三　天德寺琵琶に泣く

湯淺常山

相州北條の幕下、佐野の城主天德寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聽きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞあはれなる事を聽きたくこそあれ。その心得して語り候へ。」といへば、法師「心得候。」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。さて「今一曲前の如くあはれなる事を聽きたし。」といへば、那須與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天德寺また落涙數行に及べり。

湯淺常山
名は元禎
岡山藩儒者
天明元年（一七八一）歿、年七十四

佐野天德寺
豐臣時代の武將。佐野了伯。
慶長六年（一六〇一）歿、年四十四。

天德寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。

天德寺また落涙數行に及べり。

行に及べり。後日に、家臣の輩に、「過ぎし日の平家はいかゞ聽きつる。」といふに、家臣ども「最も面白きことにて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや。今に不審なる事に、いづれも申し合ひ候。」といへば、天德寺驚きて、「唯今までは各、をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にてさてさて力を落して候。まづ佐々木が先陣をよく合點してみられ候へ。賴朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唼を高綱に賜はりしにあらずや。

御感涙に咽ばれて候。

合點してみられ候へ。

了伯琵琶を聽く　（小堀甕音筆）

されば、そのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。あはれならぬ事かは。」とて、屢、涙を拭ひつゝ、しばしありて言ひけるは、「那須與一も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘り入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴りを鎭めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名折れたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる、その心を察して見られ候へ。武士道ほどあはれなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各、にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各、の武邊はたゞ一旦の勇氣に任せたるにて、眞實より出づるにてはなきやと思はれ候。それにては頼もしからずこそ候へ。」

武士道ほどあはれなるものは候はず。

常山紀談　常山の著、十五卷。戰國時代より德川治世の初に至る數十年間の名將勇士の武勳逸話を書いたもの。

平家物語　平家の勃興榮華よりその滅亡に至るまでの事實を、興味本位に潤飾した戰記物語。作者は藤原行長外數説ある。

この一章の句讀は平家物語の語り本を參照した。

判官　源義經。

大將軍　義經。

と言ひしかば、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり。（『常山紀談』）

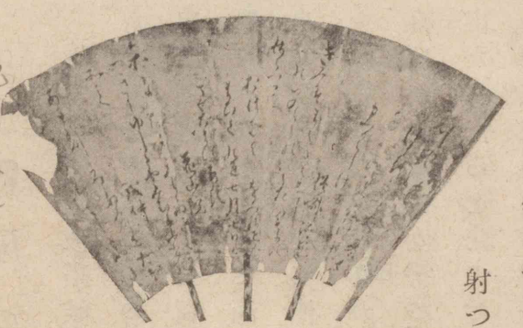
一四　扇の的

（『平家物語』）

さる程に、阿波讃岐に、平家を背いて、源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺（みね）、こゝの洞より、十四五騎二十騎、打連れ〳〵馳せ來る程に、判官程なく、三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く處に、沖より尋常に飾つたる、小舟一艘、汀へ向ひて漕ぎ寄せ、渚より七八段許りにもなりしかば、舟を横樣になす。あれはいかにと見る處に、舟の中より年の齡、十八九ばかりなる女房の、柳の五つ衣に、紅の袴着たるが、皆紅（みなぐれなゐ）の扇の日出だしたるを、舟のせがいに挾み立て陸に向ひてぞ招きける。

判官後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに」と宣へば、「射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の矢おもてに進んで、傾城（けいせい）を御覽ぜられ

んところを、てだれに狙うて、射落せとの、謀とこそ存じ候へさりながら、扇をば射させらるべうもや、候らん」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば「手だれども多く候中に下野の國の住人、那須の太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官「證據があるか」「さん候。かけ鳥などを爭うて、三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官「さらば與一呼べ」とて召されけり。



與一射落しの的（嚴島神社所藏）

與一その頃はいまだ、二十ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以ておほくび、はたそでいろへたる直垂に、もよぎ縅の鎧着て、足白の太刀をはき、二十四さいたる切斑の矢負ひうすきりふに鷹の羽わり合はせて、はいだりける、ぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓、脇にはさみ、冑をば脱いで高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。判官「いかに與一。あの扇の眞中射て、かたきに見物させよかし」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き身方の、御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん」と申しければ判官大きに怒つて「今度鎌倉を立つて、西國へ向はんずる者どもは、みな義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これよりとう〳〵鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなんと思ひけん「さ候はば外

おほくび　衽。
はたそで　端袖。

一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん。

屋島よりの壇の浦を望む

れんをば存じ候はず。御詮で候へば、仕つてこそ見候はめ」とて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まろぼやすつたる、金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取直し手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與一が後を遙かに見送つて「この若者一定仕らうずると、覺え候」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

二月十八日
壽永四年（一一八五）八月改元文治元年。

酉の刻
今の午後六時頃。

矢比少し遠ければ、海の中一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。

頃は二月十八日酉の刻ばかんのことなるに、折節北風烈しう吹きければ磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑ、漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家、船を一めんに並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふことなし。與一目をふさいで「南無八幡大菩薩別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮那須の湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させて、たばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國へかへさんと思し召さばこの矢はづさせ給ふな」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風もすこし吹きよわつて扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつ引いてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際、一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける春風に、一揉み二揉み揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、日出いたるが、夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家、舷を敲いて感じたり。陸には源氏、箙をたゝいてどよめきけり。

よつ引いてひやうと放つ。

一寸
今ならば約三センチばかり。

一五　東山より不破關まで（『東關紀行』）

仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でて東へ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山かさなり江かさなりて、はるばる遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、屢〻前途の極りなきに進む。終に十餘りの日數を經て、鎌倉に下り著きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌に至る毎に、目に立つ處々、心とまるふしぐ〳〵を書き置きて、忘れず忍ぶ人もあらば自ら後のかたみにもなれとてなり。

東山の邊なる住みかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃も漸く近き空なれば、秋霧立ちわたりて、深き夜の月かげほのかなり。木綿附鳥かすかにおとづれて、遊子猶殘月に行きけん函谷のありさま思ひ出でらる。

東關紀行　京都から鎌倉に下つた紀行文で、筆者は源光行又はその子親行ともいひ、明かでない。

仁治三年　四條天皇の御代の年號（一二四二）

逢坂の云々　逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒（拾遺集、紀貫之）關は京都と滋賀縣との國境にあつた。

遊子云々　遊子猶行、於殘月、聽函谷鷄鳴。（賈島）

打出の濱　大津市松本石場附近

粟津の原　滋賀縣滋賀郡膳所の附近

飛鳥　奈良縣高市郡高市村

勢多の長橋　滋賀縣栗太郡、琵琶湖に發する勢多川上流の橋

滿誓沙彌の歌　世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎいにし舟の跡なきがごと（萬葉集）

關山を過ぎぬれば、打出の濱粟津の原なんど聞けども未だ夜の內なれば定かにも見わからず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都遷ありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、この程は舊き皇居の跡ぞかしと覺えて哀れなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより
　名のみ殘れる志賀のふるさと

曙の空になりて勢多の長橋うちわたす程に、湖遙かにあらはれて、彼の滿誓沙彌が、比叡山にて此の海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、漕ぎ行く船の跡の白波、誠にはかなく心細し。

世の中を遁ぎ行く船によそへつゝ
　ながめしあとをまたぞながむる

此の程をも行き過ぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露しげくして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。

篠原　滋賀縣野洲郡

南山云々　影浸ニ南山ノ一青滋　濯波沈ニ赤日ノ一紅　（白樂天）

いそ…とまりけるが。こそ…限らざりけめ　飛鳥川の淵瀬　世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集讀人不知）

野路　栗太郡、今老上村

武佐寺　蒲生郡武佐村にあり、本名長光寺。

篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住みかを占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、綠深き松の群立ち、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども青くして滋濃たり。洲崎處々に入り違ひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人、此の宿にこそとまりけるが今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになり行くなど聞くこそ、變り行く世の習ひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより
　荒れのみまさる野路の篠原

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、彼の遺

とと　犬上郡鳥籠村同名の山あり。

遺愛寺　遺愛寺ノ鐘欹ノ枕ヲ聽　（白樂天）

不破の關屋　岐阜縣不破郡關原村字松尾の大木戸坂に在つた。

後京極攝政殿　藤原良經、從一位大政大臣、建永元年（一二〇六）薨、年三十八

荒れにし後は云々　人住まぬ不破の關屋の板廂……（新古今集）

堀本義明　將軍家侍醫、大博士。明治四十三年（一九一〇）歿、年七十三。

愛寺の邊の草の庵の寢覺も、かくやありけんと哀れなり。行く末遠き旅の空思ひつゞけられて、いといたう物悲し。

都出でて幾日もあらぬ今宵だに
　かたしきわびぬとこの秋風

美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越え果てぬれば不破の關屋なり。萱屋の板廂年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の、荒れにし後はたゞ秋の風と詠ませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、いやしき言の葉を殘さんもなか〳〵に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

一六　國際に用ゐられた茶の湯

老醫堀本義明翁は醫術以外にいろ〳〵な嗜みを有つてゐた方

人も許し自らも許されたのは。

グラント（1822—85）南北戰爭の時北軍の將となり、後第十八代大統領となる。

でありました。劍術、柔術、能、狂言、和歌、狂歌、俳諧、坐禪、茶の湯など、皆一通り試みられたさうですが、その中で人も許し自らも許されたのは茶の湯道でありました。翁は曾て、

グラント將軍

「何でも、人樣に勝つといふことは、とても出來ませんが、負けはしまいと思ふのはお茶だけです。」

といふ事を言はれたことがあります。そして「自分の茶はたゞ一つの流儀を習つただけでなく、殆どすべての流儀を習つたものですから、それが大層修行になつたやうに思ひます。」といふやうな事を言はれたこともあります。

翁の茶の湯について思ひ出すのは、翁がグラント將軍をもてなされた時の光景であります。明治十二年にアメリカ合衆國の前大統領グラント將軍が來朝されました。その時に於ける我が朝野の歡迎はえらいものでありましたが、連日連夜の數多き盛大な歡迎會の中で、趣味の上から最も將軍の心を惹いたものは、翁の主宰された茶の湯式の歡迎會であつたといふことです。

明治十二年（一八七九）

岩倉右府　右大臣岩倉具視。大勳位公爵。明治十六年（一八八三）薨、年五十九。

岩倉右府の懇請によつて、宴會を主宰された。

翁は岩倉右府の懇請によつて、或方面の宴會を主宰されることになりました。これについては、他の人の話をも翁自身の話をも聞いたことがあります。

私は面倒くさい、西洋人の御馳走役など厭だと言ひましたけれども、岩倉さんが是非にと言はれるので、「それでは一切私にお任せ下さい。」と言つて、とう〳〵引受けることになりました。これまでは毎日毎夜西洋眞似の下手料理を食はせられて、飽き果ててゐたところへ、とにかく新しい獻立であつたものですから、

大層喜びましたよ。まづお茶を出す時に、御菓子も趣向して、特別に源氏豆を作らせましてね。普通の紅白の外に紫を一種加へて、それを大きな鉢に入れて、私が將軍の前に持つて行きました。すると將軍がけげんな顔をして、「何だ？」と聞くでせう。そこで、「これは源氏豆といつて、炒豆に砂糖の衣をかけたものですが、今度のは特に貴國と將軍とを壽ぐために作つたので、この大豆の粒は貴國の國旗の星を象つたのであります、紅、白、紫の三色は貴國の旗の筋の色を現したのであります。どうぞこれで日本國民の微意を諒せられるやうに。」と言ひますと、將軍はあの髭面に皺をよせてニコ〳〵喜びましてね、「それは有難い、有難い。」と禮を

堀本義明筆蹟印鑑

けげんな顔をして、「何だ？」と聞くでせう。

微意を諒せられるやうに。

言ひましたよ。それからいよ〳〵お茶を出す時になつて、普通の熱いのは西洋人に飲めませんから、少しぬるくして將軍の前に持つて行きますと、コーヒを飲むやうな手附をして、直ぐに飲まうとしました。そこで、私は「お待ちなさい、茶には茶の飲み方がありますから。」と言つて、簡單に式を話しますと、立派に教はつた通りにして、あとで挨拶の中に、「私は世界を漫遊して、かやうな宴會に臨んだ事が數知れずあるが、かやうな席で人に物教へをされたといふは、今日が始めてである。しかし私はこれを恥と思はないのみならず、寧ろ大いなる名譽と思つてゐる。」といふやうな事を申しましてね、非常に滿足して歸りました。そして歸ると、直ぐに祕書官をよこして、先刻のお菓子を頂戴したいと言つて持つて行きましたが、荷に造つてみんな本國に送つたといふことです。その後また將軍に逢つて茶の湯の奥儀の話をし

ましたら、西洋の宴會の精神とそつくりだと言つて、大層喜びましてね、向うに歸つてから鄭重な禮狀をくれましたよ。……翁はいつかその禮狀を捜し出して見せると言つて居られましたが、遂にそのまゝになつてしまひました。

翁が物を書かれた時に用ゐられる冠帽の一つに「賜茶道進司」と刻つたのがありますが、それはグラント將軍を饗された時に、明治天皇から頂戴された雅號を記念されたものであります。（『野草集』）

高村光太郎
彫塑家、詩人
東京の人
明治十六年生

一七　傷をなめる獅子

高村光太郎

獅子は傷をなめてゐる。
どこか知らない
ぼうぼうたる
宇宙の底に露出して、
ぎらぎら、ぎらぎら、ぎらぎら、
遠近もない丹砂の海の片隅、
つんぼのやうな酷熱の
寂寥の空氣にまもられ、
子午線下の砦、
突兀たる岩角の上にどさりとねて、
獅子は傷をなめてゐる。

巨大な額は無敵の紋章。

そのたてがみはヤアエの鬚髪、
巨大な額は無敵の紋章、
速力そのものの四肢胴體を今は休めて、
靜かなリトムに繰返し、繰返し、
美しくも逞しい左の肩をなめてゐる。

憤怒と、侮蔑と、
憫笑と、自尊と
を含んだ
たゞ一こゑの
叫。

獅子はもう忘れてゐる、
人間の執念ぶかい邪智の深さを。
あの極樂鳥のむれ遊ぶ泉のほとり、
神の領たる常綠のオアシスに、
水の誘惑を神から盜んで、
きたならしくもそつと仕かけた
卑怯な、黑い、鋼鐵のわなを。

肩にくひこんだ金屬の齒を
肉ごともぎりすてた獅子は昂然とした。
憤怒と、侮蔑と、憫笑と、自尊とを含んだ
たゞ一こゑの叫は平和な椰子の林を震撼させた。

ぼうぼうたる
つんぼのやうな
孤獨の中。

自由と濶歩と、
勇氣と潔白と、
未來と光と。

さうして獅子は百里を走つた。

今はただ樂しく傷をなめてゐる。
どこか知らない
ぼうぼうたる
つんぼのやうな孤獨の中、
道にはぐれても絕えて懸念のない
やさしい牝獅子の歸りを待ちながら、
自由と濶歩との外何も知らない、
勇氣と潔白との外何も持たない、
未來と光との外何をも見ない、
いつでも新しい、いつでもうぶな魂を、
寂寥の空氣に時折訪(おとづ)れる

目もはるかな薫風に吹きさらして、
獅子は傷をなめてゐる。

一八　運命の丘　その一

島村抱月

モスコー市の西南、雀が丘の一部、丘頂を舞臺の前面に現して、背後は一面にモスコーの市街を見下した景色。秋日和の午後二時過ぎの日光が、強くモスコー河に反射してゐる。市内はすべて本文にある通りの景。

軍服のナポレオン、馬を麓に乗り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか〳〵と小急ぎに、下手から丘の頂に現れる。續いてダリュー、モルチュール、アンドレー及び三四の將校從卒等登場。

ナポレ　モスコー！　モスコー！

ナポレオン、モスコーの市街を見るや否や、

島村抱月
明治大正の文學者
早稲田大學教授
名は瀧太郎
島根縣の人
大正七年（一九一八）歿、年四十八

モスコー
ロシヤの舊都、一八一二年九月十四日ナポレオンこゝに攻め入る。

ナポレオン（1769—1821）

クレムリン
露國モスコーの宮城。

まるで古い繪本から抜け出したやうな町だな。

と叫んで猶ほ熱心に向うを見てゐる。

ダリュ　モスコーだ！　モスコーだ！　他の人々もこれに和して、爭うて市街の方を見る。

ダリュ　そら見給へ、あれがモスコー河だ。その向うがクレムリンさ。丸の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチ　なるほど、綺麗だ。まるで古い繪本から抜け出したやうな町だな。

ダリュ　あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つてるね。東洋的ぢやないか。その前

現時のモスコー市街

を、まるで灰色の熊が馬に乘つたやうなコザークめが、大槍を横たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。アンド北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる。たしかに神聖な町といふ感じがしますね。モルチ眩しいやうだ。金の十字架がまるで星を散らばらしたやうに光つてるぢやないか。あれがみんな寺だらうか。寺の多い所だな。外廓も内廓も。見給へ、町の半分は寺だ。尖塔がまるで雜木林のやうに並んでる。その一本々々に金の星がかゝつてゐるのだ。

アンド寺院ばかりが三百近いでせう。それから所々新月の徽章も光つてゐます。マホメタンの寺でせう。かうなると壯觀ですね。十字の星と新月が、この古い町の空に撒いたやうに浮かんでゐる。これだけでも胸が躍りますね。あれがこの町の命なのだ。命の象徴があゝして光つてるのだ。平和ですね。ついそこらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、こゝへ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。その中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてゐるところは、なるほど女性的ですね。ロシヤ人はこの町を御母さんといふさうだが、私等には、美しい尼さんといふ感じですね。

モルチ所々隨分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな所だ。どうしても繪本だ。これが本當にモスコーなのかな。夢のやうだ。

飽かず市街を見てゐたナポレオンは、この時始めてこちらを向き、近くに立つてゐるモルチュールの肩を輕く叩いて、

ナポレおい！

モルチ　はッ！　皆一齊にその方を向く。

ナポレ　モスコーへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

ナポレオン

モルチ　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレ　夢ぢやあない。本當のモスコーへ來たのだ。とう〳〵とう來たのだよ。

ダリュ　夢が事實になつたのですね。

ナポレ　お前にも似合はん事をいふね。初から事實さ。夢が何で事實になるものか。おれがパリでセギュール伯に言つて聞かせたのはそこさ。おれには初から、このモスコーが目に見えてゐた。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリュ　陛下のその筆法によりますと、モスコーは陛下の運命でございますね。

ナポレ　運命だ、全く運命だ。おれには是非とも一度このザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコーは私の愛だ。古い〳〵前世からの愛であつたのだ。先刻一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懷かしい愛の都會を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

振りかへつてまた市街の方を見る。

ダリュ　前世からの愛ですね。約束された土地ですね。人生にはたしかにさうしたものがあります。

モルチ　愛も約束もいゝが、早く陛下をクレムリンへお供したいもの

だな。

アンドミロラドヴォッチ少將が歸つてから、かれこれ二時間近くにもなりませう。もう町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい。今やつと敵軍の後衞が町を出はづれました。あの森の陰に續いてるのがそれです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居る九萬の兵が、すつかり退却したわけです。

ダリュ　やあ、ミュラー將軍が市街の入口で盛んに歡迎されてゐるぞ。貧民どもが珍しさうに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱ひだ。

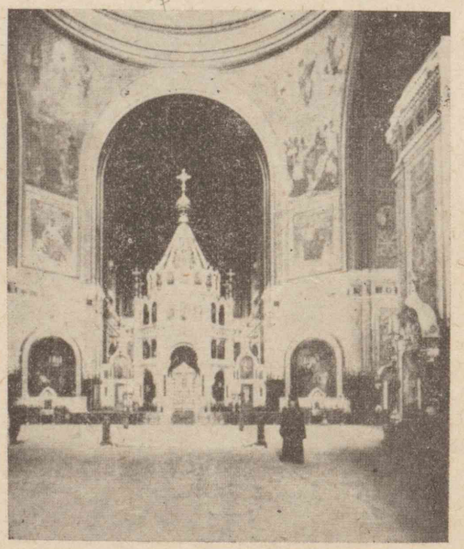
ナポレクレムリン！　響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！　地圖を見せないか。

アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン手に取つて見て、

ふむ。

顏を上げ、また市街に見入つて、

あれだ。クレムリン、クレムリン。おれは嘗てその宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さうさう、イタリヤから磨かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが腰をかけてゐた。あのアレキサンドルの神經質らしい顏は決して憎い顏ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。



クレムリン宮殿の内部

直立してゐた將校等互に顏を見合はせる。ナポレオン顧みて、

ねえ、さうだらう？　全くロシヤ人は憎くない國民だと思はないか。おれは好きだよ、おれは。

モルチ　全く憎さげのない國民でございますな。のろッとしてゐて、素直で、勇敢で。

全く憎さげのない國民でございますな。のろッとしてゐて、素直で、勇敢で。

ダリュ　いや、我々の脈管に流れてゐる血が、同じケルトの源だから、…

アンド　それもさうでせうが、一方からいふと、寧ろ違つてゐるから相引くのかも知れません。冷たい外部の壓迫で反抗的に沸いた彼等の血は永久に熱いのです。ところが、自然が溫めてくれた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、この東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

自然が溫めてくれた我々の血は冷熱が早い。

モルチ　はゝ、君のいふことは、あんまり感に入り過ぎていかんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ。忘れちやあいかん。

あまり感に入り過ぎていかんよ。

アンド　ですが、愛は強い弱いの關係ではありません。

モルチ　はゝ、生意氣な事をいふなよ。

ダリュ　まあ、いゝさ。若いからな。戰をしながら人生を論ずる筆法だらう。ねえ君。

ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを大股に往つたり來たりしてゐたが、寄つて來て、

ナポレ　まだ來ないか。遲いぢやないか。

モルチ　もう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつてくれ。

アンド　は。

運命の丘（泰西名畫）

下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る。

一九　運命の丘　その二

島村抱月

ダリュ　陛下はお疲れであらうから、そこらへ假に何したらどうだらう。

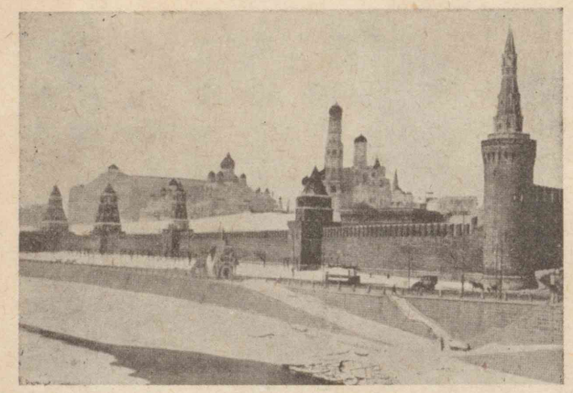
ナポレ　いらん、〳〵。おれの顏に疲れが見えるか。

ダリュ　いや、お顏色はかへつて益〻活氣を帶びて參るやうでございますが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレ　おれには疲勞といふ事はない。この眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。この晴れた空に、この壯麗な景色を見て興奮せずに居られるか。ダリューなぞも顏色が違つて來たぜ。ついさつきまで君等の顏にはボロディノの影が粘

おれには疲勞といふ事はない。

興奮の心の褪せない内に、日記をつけたい。



クレムリン宮殿の外観

りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコーの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つてゐる。今にクレムリンの城へ入つたら、君等は一番がけに何をするだらうな。モルチュールは何が欲しいか。

モルチ　久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンド　私はまづ靜かな部屋に引込んで、この興奮の心の褪せない内に、日記をつけたいものでございます。

ダリュ　私もそれに賛成。

ナポレ　さう〳〵、ダリューは歴史家で、詩人だつたな。

運命の丘

「予の辭書には「不能」の文字なし。」と豪語したナポレオンが、始めて「不能」に直面したのは、この時である。顔面の表情は見るべくもないが、兩手を後にして、あこがれのモスコーが一塊の焦土と化して行くすさまじい炎と煙とを望んだ後姿には、いひ知れぬ物淋しさが漂うてゐる。世界の大帝王を理想としてゐたこの不世出の英雄の夢は、美しい虹のやうに、この時からうつろひ始めたのである。作者ヴシリー・ヱレスヤギン（1844—1904）は、ロシヤが生んだ最大の畫家で、ロシヤの近代美術はこの人によつて黎明を告げたといはれる。作風は寫實主義で、好んで凄じい戰爭や、暗澹たる戰禍を描き、飽くまでも深刻に戰爭の苦惱と慘害と恐怖とを表現した。彼のすぐれた作の中でも、殊に傑作として有名なのは、ナポレオンがモスコーに於ける戰爭を主題とした數枚の連作で、これはそのなかの一つである。彼は一九〇四年、日露戰爭當時、從軍畫家として旅順口にあつたが、その乘艦が日本艦隊と戰つた際に、如何にも戰爭畫家らしい壯烈な最期を遂げ、同じ戰役に於ける名高い戰歿將校以上に世界的に惜しまれた。

ダリュ　「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレ　忘れてゐたのだよ。

ダリュ　忘れられて少しも恨はございませんな。私などは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなもの。

ナポレ　はゝ、悟つたね。

ダリュ　却つてこのアンドレー君などが、十九世紀の若い息を呼吸して、自然と詩人になつてゐます。

ナポレ　ふん、若い者の時代か。おれなどは、ダリュー、どちらの組か。若い方か。古い方か。

ダリュ　さやう、——陛下は勿論私なぞよりも若くていらせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレ　そのわけは。

ダリュ　さやう、——十八世紀の繊弱な冷たい文明に對して、強い勢力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレ　ふむ。しかしその力はどこから來るだらう。私にいはすれば運命だ。運命！　力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つてもらひたい。

アンド（進み出でて）陛下、私は唯今の瞬間に於て、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！　何といふ深いお言葉でございませう。手がこの通り感激に顫へて居ります。どうか握手を願ひたうございます。

ナポレ　よし〳〵。

微笑しながら固く握手する。その途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆愕然としてその方を向く。ナポレオンも俄かに正氣づいたやうに、きつとなる。

新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなもの。

十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

十八世紀の繊弱な冷たい文明に對して、強い勢力の要求が陛下のお體に權化した。

私は運命の權化だ。

神仙の如き高風。

モルチ　あれだ〳〵。　外廓に接した東の所に煙が上つてゐる。何事だらう。うむ。騎兵が入つて行くやうだから、今に分るだらう。こりや長くかうして居るのは危險かも知れんよ。使節はどうしたのだらう？　どうして遲いのだらう？

一同無言で待遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオンこちらを向いて、

ナポレ　今に來る。きつと來る。さつきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドは。

再び下手へ往つて命令を傳へる。

ダリュ　町がだん〳〵靜かになつて來るやうに感ずるが、とうかね。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるでなくなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀨の音が聞える。

動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるでなくなつたやうな感じがする。

河の瀨の音が聞える。

はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。

モルチ　はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。

ナポレ（モルチュールの方へ鋭い一瞥を投げて）馬鹿ッ！

モルチ（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。しかし私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます。モスコーに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はしてゐたいと思ひます。私は今以て、まだ確實にモスコーを占領したとは思つて居りません。

ナポレオン無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして、

ナポレ　分つたよ。分つたよ。しかし私はもう事實に占領したつもりでゐるね。さつきから、クレムリンの宮城で大夜會を開く

手筈まで考へてゐる。二百九十五寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、その演說の腹案までこしらへた。このモスコーにはお前等のうち誰を總督にしようかと、そんな事まで考へてゐる。モスコー占領！　もう動かん事實だ。夢ぢやない。

と言つて、じつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。この時、一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこらを歩きはじめる。

ダリュ　もう何時だらう。日があんな方へ行つたね。どうだらう。兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチ　どうもそれがよくはないかな。暗くなると面倒だぞ。さつきの爆發が何か意味があるのぢやなからうか。

ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる。日影が薄くなつて、所々の庭木の森が黒ずんで來る。間を置いて、

アンド　あゝ、來た〳〵！　報告を持つて來た。

騎兵一人飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて、

あゝ、これはさつきの爆發に關聯した事です。（急いで讀む中に顔の色が變る）これは怪しからん。大事件でございます。

皆々驚いて聞き耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる。

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、その一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場所はドロゴミノフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人のダッタン人

を捕縛したのださうです。

モルチ　そのダッタン人を調べてみたのか。

アンド　取調べたが、更に口を開かないとあります。

モルチ　そりや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやなるまい。

アンド　勿論やつてるさうです。

モルチ　それからその捕縛したダッタン人は、連れて來たのか。居るならこゝへ連れて來いつて。通譯をつけてな。

ナポレ　なあに、心配するには及ばない。大勢はもう極つてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追ッ放してやれ。

モルチ　でございますが、この際注意しませんと……。

ナポレ　いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

立つてゐる騎兵に向つて、さういつて行け。

騎兵敬禮して引きかへす。

それよりか、一方の樣子はどうだ。一向に報告が來んぢやないか。誰かこのうちで行つて見い。

アンド　私が參りませう。

敬禮をして行かうとする時、第二の傳令來る。

アンド　おゝ報告か。

下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた樣子で、聲をひそめて話す。アンドレーの顏色また〳〵變る。他の二人も寄つて來て、報告を聞き、顏を見合はす。ちよつと密話をして、ナポレオンの方を振向くと、立つて鋭くその方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてて他を向く。同時にアンドレーがつか〳〵と群を離

れて進み寄り顫へた聲で、

アンド　陛下、モスコーは空虚でございます。

ナポレ　えゝ？　モスコーが空虚？

アンド　はい、空虚でございます。

ナポレオンは聞くと同時に、アンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝじつと見てゐる。顔の色變る。アンドレーその他皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顔を見つめて身動きせず、しばらくの間、森として聲なき氣持。

ナポレ　馬車を持つて來い。

士官の一人走り去ると、後からナポレオン大股につかつかと丘を下手に降りる。皆々沈默のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく殘る。

（『運命の丘』）

高濱虛子
俳人、小說家
名は清
愛媛縣松山の人
明治七年生

二〇　七家句さまざま

高濱虛子

春寒や砂より出でし松の幹
春風や鬪志いだきて丘に立つ
蛇逃げて我を見し眼の草に殘る
大空にまたわき出でし小鳥かな
土近く朝顏咲くや今朝の秋
秋日和子規の母君來ましけり
故鄕の月の港を過るのみ
とんぼうのさら〳〵流れとゞまらず
遠山に日のあたりたる枯野かな
徐々と掃く落葉箒に從へる

河東碧梧桐
俳人
名は秉五郎
愛媛縣松山の人
昭和十二年歿
年六十五

村上鬼城
俳人
名は荘太郎
群馬縣高崎の人
昭和十三年歿
年七十四

春雨や諸國荷船の苫の數　河東碧梧桐

背に近くもたれ心や春の山

長閑なる水暮れて湖水灯ともれる

蟹とれば蝦も手に飛ぶ涼しさよ

散るころの櫻隣のも吹きさそひ來る

雛かざる朝の渚を歩き貝拾ふ

ひとりかへる道すがらの桐の花おち

蚊帳に來た蟬の裾のべに一鳴きす

一つに渡る柑子積む苫濡れのまゝ

榛名山大霞して眞晝かな　村上鬼城

生きかはり死にかはりして打つ田かな

本田あふひ
男爵本田親濟氏
夫人
東京の人
明治八年生

久保より江
醫學博士久保猪
之吉氏夫人
愛媛縣松山の人
明治十七年生

ゆさ〳〵と大枝ゆるる櫻かな

雀子の大きな口をあきにけり

船ばたに並んで兄鵜弟鵜かな

大雨に獅子をふりこむ祭かな

大蜘蛛の虚空を渡る木の間かな

小鳥この頃音もさせずに來て居りぬ

道あるに雪の中行く童かな

埋火や思ひ出づること皆詩なり　本田あふひ

しぐるゝや灯(ともし)待たるゝ能舞臺

孔雀草になげかけてある襷かな

土手につく花見づかれの片手かな　久保より江

京の宿浪速の宿や青すだれ　長谷川かな女

戸を搏つて落ちし簾や初嵐　星野立子

羽子板の重きが嬉し突かで立つ　長谷川かな女

疲れ來し子を抱き上げ春の風　星野立子

家々の間より見ゆ桐の花　十返舎一九

二一　大佛殿の柱くゞり

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧舎那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎兵衛、北八こゝに法施し奉りて、彌「ナント話に聞いたよりか、がうてきなもんぢやあねえか。アノかうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるげな。あの鼻の穴からは人が傘をさして出られると……おうしろへ廻つて見よう。オヤ、お背中に窓があいてゐらあ。」北「あれは大方汐を吹く所だらう。」彌「ナニ、鯨ぢやあるめえし。」北「オヤ〳〵、あれみんなが柱の穴をくゞつてゐるわ。」彌「ホンニ、こいつは奇妙々々。」と、この御堂の柱の許には、ちやうど人のくゞるだけ切り抜きし穴あり。田舎道者ども戯れにくゞりぬける。北八も同じくくゞり、北「コリヤ面白え。おいらはくゞれるが、彌次さんは肥つてゐるからぬけられめえ。」彌「おれだとつてナニこれが。」と、四這になつて、柱の穴へ半分程入りかけたが、一向にぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の鍔が横腹につかへて痛

十返舎一九

二十七間　約四十九メートル。
四十五間　約八十二メートル。
ナニ、鯨ぢやあるめえし。　ホンニこいつは奇妙々々。

十返舎一九　江戸時代の戯作者　本名重田貞一　天保二年（一四九一）歿、年五十七
毘盧舎那佛　大日如來。
六丈三尺　約十九メートル。
故長谷川零餘子夫人　東京の人　明治二十年生
星野立子　高濱虛子氏令嬢　彫刻家星野吉人氏夫人　愛媛縣の人　明治三十六年生

コリヤひよんな事をした。

みこらへられず。彌次郎顏を眞赤になし「アイタヽヽ。コリヤひよんな事をした。」北「オヤ、どうした。ぬけられねえか。」彌「これ、手を引張つてくりや。」北「ハヽヽヽ、こいつはをかしい。」と、彌次郎の兩手をぐつと引張る。彌「アイタヽヽ。」北「弱え男だ。ちつと辛抱すればいゝ。」彌「あとの方から足を引いてくれろ。」北「承知々々。」と、後へ廻り兩の足を捕へ「やアえんさアヽヽ。」彌「あいた〳〵。」北「ちつと堪へなせえ。よつぽど出かけたやうだ。やアえんさアヽヽ。」彌「アヽ、待つてくれ待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。コリヤやつぱり前の方から引出してくれ。」といふ故、北八また前へ廻り、兩手を捕へて引く。北「やアえんさアヽヽ。ソレまたこつちへよつぽど出て來た。」彌「コリヤたまらぬ。アイタヽヽヽヽ。北八これではいかぬ。初手のやうにまたあとへ引戻してくれ。」北「エヽ、いろいろなことをいふ。」と、また後から足を捕へ、「やアえんさアヽヽ。」

コリヤいゝ算段がある。

兩方から引つぱつては出る瀬がねえ。

彌「待て待て待て。コリヤどうでも前の方から引いてもらはう。」北「エヽ、そんなに前へ廻つたり後へ廻つたり、引出しては引戻し、いつまでも果てしがねえ。コリヤいゝ算段がある。」と、そばに見てゐたりし參詣の人を賴みて、北「モシ、どうぞこつちからおめえ引張つて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。」彌「ばかアいふな。兩方から引つぱつては出る瀬がねえ。」北「出る瀬がなくても、兩方から引張ると、前へ廻つたり、後へ廻つたりする世話がなくていゝわな。」參詣の人「イヤ兩方からあのさんの體を引伸ばしたら、ツイ出られさうなもんぢや

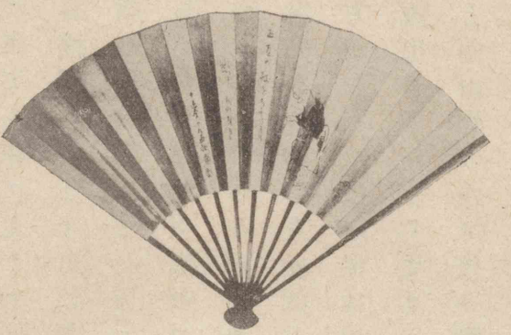
奈良の大佛の柱抜け

あろぞい。」北「コリヤいゝ事がある。酢を一升も買つて來て、彌次さん、おめえに飲ませよう。」彌「なぜ。酢を飲むとどうする。」北「ハテ酢を飲むと痩せるといふことだから。」

酢を一升も買つて來て、彌次さん、おめえに飲ませよう。

參詣の人「ハヽヽヽ、そないな事いうたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ。どこぞへいて槌借つて來さんして、頭を後の方へ打込まんしたがよいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめえ。」參詣「されば、そこはどうも請合はれんわいの。」

そないな事いうたてて。



十返舍一九戯書の扇

されば、そこはどうも請合はれんわいの。

コリヤ、わしが智慧貸そわいの。何ぢやろと。あのさんのからだを和かにして、引出すがよかろさかい、かうさんせ。土砂とて來てかけさんせいの。」田舍者「すんだら土砂のウぶつかけずと、一番の桶さア買つてきなさろ。手足をちとべし、をん曲げたら入るべいのし。」彌「エヽ、いめえましい事をいふ。むだどころぢやアねえ。北八、早くどうぞしてくれぬか。」北「待ちなよ。ハヽアおめえ脇差の鍔が横腹へこだはつて、いてえのだ。」と、手を差入れてひねくり廻し、やう〳〵脇差をぬいて取る。彌「いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。」北「ドレ〳〵、イヤ、時にどなたぞ前の方から押して下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引出しますから。やアえんさア〳〵。」參詣「それ出るわいの。まちつとぢや、いけまんせ。」彌「アヽウヽヽアヽいてえ〳〵。」北「しめたぞ。えんやア〳〵。ソリヤ出たぞ〳〵。」と、やう〳〵のことにて引出せば、彌次郎は大汗をふき〳〵、ほつと溜息つきながら「ヤレヤレありがてえ。コリヤどなたも御苦勞でございやした。あゝ、生むよりか生まれる身の方がよつぽどせつねえ。」

脇差の鍔が横腹へこだはつて、いてえのだ。

エヽ、いめえましい事をいふ。

生むよりか生まれる身の方がよつぽどせつねえ。

がすり切れて、あばら骨が今にびり〳〵する。」

傘さして出るお鼻よりはしらなる

あなおそろしや身をすぼめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮華王院の三十三間堂にて、

いやたかに五重の塔にくらべ見ん

三十三間堂のながさを

（『東海道中膝栗毛』）

蓮華王院　大佛の南。蓮華王院は寺の名。本堂は三十三間堂。長寛二年（一一六四）創建。

本間久雄　文學博士　早稲田大學教授　米澤市の人　明治十九年生

二二　小鳥に道を説いた聖者

本間久雄

フロレンスからローマへの途中を、私はすこし廻り道してアッシジに立ち寄つた。こゝの名高い聖フランシスの寺を見たいためである。

アッシジの聖フランシス――この名は常に不思議な魅惑をわれわれの心に齎らす。聖フランシスは、アベラールとは別な意味で文藝復興の夜明けの鐘をついた人であつた。アベラールが峻烈な理性の光を通して、人間性を中世の暗闇から解放しようとしたのに對して、聖フランシスは、純眞無垢の感情をほしいまゝに流露せしめることによつて、それを試みようとした人であつたからである。

聖フランシス小鳥に說教す

アベラール（1079―1142）　文藝復興の夜明けの鐘をついた人であつた。

峻烈な理性の光。

純眞無垢の感情。

聖フランシスは詩人であつた。單に人間を愛したばかりでなく、自然を愛し、草木を愛し、禽獸を愛し、更に無生物なる石を愛し、雲を愛し、火を愛し、水を愛した。すべてのものが、彼に取つて、神の恩

寵の現れであつた。

聖フランシスが小鳥に道を說いた傳說は、餘りにも有名になつてゐる。

彼が友なるセラノのトマスと一しよにスポレトの谷間を通る時であつた。行手にさまざまの鳥――鳩や烏やその他の鳥どもが群をなしてゐた。ふだんから鳥類に特別な愛を感じてゐた彼は、それを見ると、トマスを後に殘してすぐさまその方へ走つて行つた。鳥の群は彼を待つてでもゐるかのやうに、じつとして飛び去らなかつた。彼は非常に喜んだ。そしていかにも謙虛な態度で、神の言葉に耳を傾けるやうにと、彼等に賴んだ。「兄弟たちよ。お前たちは造物主を讚へなければならぬ。造物主はお前たちに對して、身體をつゝむためには羽根を與へ、空を飛ぶためには翼を與へ、その他お前たちに必要なすべてのものを與へて下さつた。

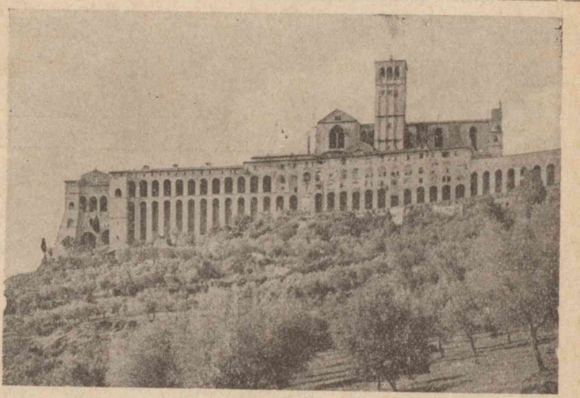
スポレト　ローマの北方約八十キロ。城址がある。

造物主は動物の中でも、特にお前たちを高貴なものとして造つて下さつたのだ。考へて御覽なさい、お前たちのために、清い大氣の中に、お前たちの家を用意して下さつてゐるではないか。お前たちが種を蒔き實を刈り取る煩ひなくして、立派に生きて行けるやうに、お前たちを保護して下さつてゐるではないか。」

彼がかう語るのを聞いて、小鳥の群は、いかにも感動したやうな樣子で、或ものは首を伸べ、或ものは翼をひろげ、或ものは嘴をひらいて彼を仰ぎ見た。彼はマントルの袖で、小鳥の頭や身體をやさしく撫でながら、彼等の中を分けて歩いた。それから彼等のために祈を上げ、十字を切つて、やがて彼等を飛び去らせた。

彼に關するかういふお伽噺めいた傳說も、教會がすつかり形式に墮して、純眞な感情の發露が全く閉されてゐた當時を思ひ合はせると、そこにお伽噺以上の重大な意義がある。隨つてそこに今

猶ほ今日のわれ〳〵を惹きつける魅力があるのである。



聖フランシス寺

アッシジ　中部イタリヤ、ウンブリヤの町。ペルジヤの東南十九キロ。

寺は十三世紀の半ばに建てられたもので、外觀のひどく簡素なのは、清貧を友としたこの聖者の記念的建物としては極めてふさはしいものであつた。

アッシジはイタリヤの田舍町によく見るやうな、小さな山の頂から裾野にかけて展開された田舍町であつた。そして聖フランシス寺は、ちやうどこの山の頂に建てられた寺であつた。

寺は十三世紀の半ばに建てられたもので、外觀のひどく簡素なのは、清貧を友としたこの聖者の記念的建物としては極めてふさはしいものであつた。

この寺でフランシスカン派の僧侶たちが營む晨朝の勤行に侍し得たのは、私に取つて忘れがたい印象であつた。私はこの寺で打ち出す午前五時の鐘と共に起きて、ちやうど私が宿を取つた寺の傍にあるスバシオといふホテルを出た。折から二月の初で、そこから寺の門まで僅か一町ばかりの間ではあつたが、山の上は身を切るやうに寒かつた。あたりはまだ殆ど眞暗で、空には星が冷たさうにきらめいてゐた。

寺の內は森閑としてゐた。ところ〴〵にともされたかすかな蠟燭の光をたよつて、段々奥の方へすゝむと、莊嚴な祭壇がある。その祭壇を圍んで、いづれも黒い衣を裾長く纏ひ、頭のいたゞきを圓く剃つて、黒い鉢卷やうの頭巾を冠つてゐる老若の寺僧たちが、朝の勤行にいそしん

アッシジの僧侶

蠟燭の光は、四面の壁にヂョットオの筆になつた、フランシスカン派の教義を象徴した貧、貞操、服従の三つの繪と、外に、聖フランシス禮讃の壁畫をおぼろげに照らしてゐる。

ヂョットオ（1278—1334）

でゐる。祭壇には大きな蠟燭が幾つもともしてあるので、暗い寺の内に、このあたりだけがぼんやりと繪のやうに浮き出してゐる。そしてその蠟燭の光は、祭壇のちやうど上の天井を三角形に仕切つた四面の壁に、ヂョットオの筆になつた、フランシスカン派の教義を象徴した貧、貞操、服従の三つの繪と、外に、聖フランシス禮讃の壁畫をおぼろげに照らしてゐる。すべてがこの寺にふさはしい情景である。

朝勤めの終つたのは七時近くであつた。それから私は一人の年老いた寺僧に頼んで、更に寺の二階の大廣間の壁に描かれたヂョットオ筆の有名な聖フランシス傳の壁畫を見せて貰つた。壁畫は全體で二十八面。上つた時は、あたりがまだ薄暗くて、よくは見えなかつたが、畫面の前を行きつ戻りつしてゐるうちに、細長い窓から漏れて來る朝の光で、だん〳〵はつきりと見えるやうにな

簡素でどこかに稚拙なところのある筆致。

金田一京助（きんだいちきやうすけ）
國語學者
文學博士
東京帝國大學助教授
早稲田大學、國學院大學講師
盛岡の人
明治十五年生

つた。壁畫はところ〴〵剝落してはゐるが、その簡素でどこかに稚拙なところのある筆致は、この聖僧の生涯を描くに適はしいもののやうに思はれた。

私は、やがて寺を辭して、寺の前の廣場に出た。夜はもうすつかり明け離れてゐる。そして眼下にはあざやかにアッシジの町が見え、町から山へうねつて來る道々には、冬枯の中に淋しく絲杉の立つてゐるのも見える。町のあなたは西の方にはるかに開けたウンブリヤの平野で、その盡きるところに、雪をいただいた連山が朝日に照りはえてゐたのも、またなき眺であつた。

二三　アイヌ民族の純情

金田一京助

アイヌの民族的敍事詩は、天地開闢の古傳から、創業の祖神が鬼神を征服（ことむ）け、惡魔を平げた功業を謠つた宗教神話や、遠近の諸豪傑

が遺した雄々しい英雄譚に至るまで、幾百篇と限りもなく多くあるが、その中に、『ユーカラ』と呼ばれる、半ば空想化され、藝術化されたトミサンペツ、シヌタプカの英雄兒が、孤兒の境涯から生ひ立つて、四隣の強敵を討ち靡け、國土第一の強者と謳はれる一代を譜つた花々しい物語の詩がある。それは幾多の標題の下に於て様々の筋に物語られ、長いものは、幾篇かの長い戰物語から成立つて、秋の夜長を譜ひ明かして、やつと一曲を終るといふやうな雄篇をも生じてゐる。

アイヌの餅つき

かういふ大作になると、聽くものは無論深い感興に浸つて、一種の藝術境を爐邊に現出するのであるが、それにまた、アイヌの敘事詩が我々の謂はゆる文藝と違ふところは、アイヌでは、物語の内容

ユーカラ　アイヌ語で書かれた古代の敘事詩。

一種の藝術境を爐邊に現出する。

がそのまゝ聞く者語る者の信仰の事實なることである。殊に神神の物語歌になると、その全部が人々の生きた信仰で、それゆゑに、今日かうして祭るのだ、かうして尊ぶのだ、かうして祈るのだ、かうして守らねばならぬのだ。」といふ風に、一々がそれ〴〵信仰箇條を形づくるのである。言ひ換へれば、それはアイヌに取つて單なる藝術ではなくして、神聖な歷史であり、經典であり、同時に部落の法典でもあるのである。それ故にこそ敬虔な心を以て一言一句も違はぬやうに傳承されるのである。懸命の努力の下に立派に記憶されて殘つて來たのである。

この『ユーカラ』を私が始めて聞いたのは、日高の古老カネカトクの口からであつた。その後、東京の上野に開かれた拓殖博覽會のアイヌ小屋に雇はれて來たコポアヌといふ紫雲古津の村の名門出のお婆さんから、再びこの詩を聞くことを得たが、そのコポアヌ

物語詩は、アイヌに取つて單なる藝術ではなくして、神聖な歷史であり、經典であり、同時に部落の法典でもある。

紫雲古津村　北海道日高國沙流郡。

の話によつて、同じ紫雲古津にワカルパといふ盲目の老爺さんがゐて、『ユーカラ』に通じてゐることを知つた。そしてその老爺さんが、平生口癖に「今の若い者は日本の事ばかり知りたがつて、『ユーカラ』のやうなアイヌの古い話などをば知らうともしなくなつた。自分が死んだら沙流川下遊の傳說は、一緒に亡びてしまふであらうが、誰か文字のある人に逢つて、筆記でもして貰つて死にたい。」と言つてゐるが、『ユーカラ』の中でも「虎杖丸の曲」と「蘆丸の曲」と、この二つの祕曲を知つてゐるのは、この盲爺さんの外にはなからうといふことを知つた。

大正二年（三五三）

私は久しくこの祕曲の名を聞いてゐるが、まだそれを耳にしたことがない。それに私は、どこかに殘存する遺老を探して、今の內にそれを筆錄して置かなければならぬと思つてゐたので、早速コポアヌを通じて、私の意中をワカルパに傳へた。そして大正二年の七月、コポアヌと共にこの盲ひたる老詩人を私の家に迎へることになつた。

若い時は、膂力もあり、辯才もあり、鹿を逐ひ、熊を搏にして曾て人後に落ちず、且つ兄たちにも越えた才幹を有つてゐた。

とかく有りがひ

ワカルパは紫雲古津の古老ウトムリウクの弟で、若い時は、膂力もあり、辯才もあり、鹿を逐ひ、熊を搏にして曾て人後に落ちず、且つ兄たちにも越えた才幹を有つてゐて、立派な暮しをしてゐたが、不幸にして中年から目を患ひ、妻のタウクノと、夫婦ながら盲目になり、緣邊を頼つて、有るか無きかの世を送る身の上とはなつた。しかし盲目になつたがために、天稟の强記が一層の力を加へて、『ユーカラ』の外に數多くの昔話を語んじながら、新しい世間から、とかく有りがひな

なしに取扱はれつゝ、あぢきない世をかこち暮してゐた。

しに取扱はれつゝ、あぢきない世をかこち暮してゐたが、そこへ思ひ設けぬ招を受けたので、彼は「おい、どんなもんだ。歸りには薩摩薯の一俵も、村の衆へ土産に持つて來てやらうぞ。」などと、喜び勇んで出京したのであつた。

これがこのアイヌのホメロスとの永久の別れにならうとは、神ならぬ身の知るよしもなかつた。

ワカルパが半生の蘊蓄は、愈〻叩けば愈〻深く、私は一夏、朝起きるから夜寢るまで、一室に起臥して、根かぎりその傳承をローマ字で筆錄した。それは「虎杖丸」「蘆丸」の二曲の外、十四篇二萬行の敍事詩（エポス）と、短い神話の詩篇十曲とで、總計一千頁の『古事記』と『戰記物語』とが出來上つたが、惜しいかな事業半ばに、ワカルパ夫婦を扶養してゐた身寄が、一家をあげてチフスに罹つたといふ報知（しらせ）が來た。そして醫藥の道のない部落の人々が、皆この翁の祈禱にすがつて來るので、彼は再來を約して八月の末に歸村したが、これがこのアイヌのホメロスとの永久の別れにならうとは、神ならぬ身の知るよしもなかつたのである。

ホメロス　西紀前約八九百年前に生存してゐたギリシャ最古の敍事詩人。長篇敍事詩『イリヤッド』『オデッセイ』の作者。

魂に沁み入るやうな哀話。

私がワカルパの長逝を知つたのは、年を越して翌春の年賀狀と一緒であつた。その後も一つ年を越えて、大正四年の夏、私は樺太東岸の全アイヌ部落を巡訪しての歸るさ、秋に入つてから、日高へ廻つて、親しくこの紫雲古津に翁の亡き跡を訪うた。そこで、翁から噂に聞いてゐて耳に親しいその村の誰彼に逢ふことが出來、特に兄のウトムリウクや寡婦のタウクノ、遺子のユキ等には、涙と共に初對面の會釋をした。その夜、內地でいへば、故人の三周忌、アイヌの間に行はるゝ一種の追善供養が、扶養者ウレシハックの家で盛大に行はれた。

その晩の事である、私が圖らずも故人に關して魂に沁み入るやうな哀話を聞いたのは。祭祀の祈詞（のりと）も式も全く濟んで、一座が酒

宴に移り、和氣靄々として、男子たちは上座に酒を酌み交はし、女子たちは下座で歌舞を始めてゐる時であつた。爐端に私と對座してゐた隣の家の少しとぼけた青年が、ボツ〳〵と、誰に言ふともなく、こんな事を語り出した。

「盲爺さんがよ。をかしかつたな。「東京は魚の貴いところだ。世話になつた旦那へ沙流川の生鮭の一本も送つて上げたら。」さう言つて、旦那に貰つて歸つたお金で、網を編む絲を買つて來てよ、盲爺さん、手さぐりに、若い頃の手に覺えのある網すきに取りかゝつたもんだ。盲人の一心で、とう〳〵網を造り上げたてア！　何十日掛つたけな。鮭が登る時分だから、川の水が、もう切れるやうに冷ツこいや。それを毎晩一時二時頃、眞暗な中を起きて、裏の沙流川へ下りて、腰きり漬つて鮭を追ひ廻してゐたてア。全くの手さぐりでな。」

川の水が、もう切れるやうに冷ツこいや。

青年はこゝまで言つて、さもをかしさうに、大口をあけてアツハツハと笑つた。

「可哀さうによ、盲爺さん！　せめて盲鮭の一匹も來て引掛かつて呉れればいゝのに、……追ひ廻す方に目がなくて、逃げる方に目があるんだからな！　どうしたつて取れつこがないや。それでも懲りずにやつてたてア。皆に笑はれながらよ。とうとう一匹も取りかねて、その中に死んぢまつた。」

青年はさう言つて私の顏を見て、またから〳〵と笑つた。私も釣り込まれて、笑つてしまつた。が、笑つてはしまつたけれど、眼からは涙が後から〳〵と出て、拭いても〳〵止らなかつた。ゆくりなく、このうつつけた青年の口からこぼれたからこそ、これが私の耳にはひつたのである。故人のこんな深い心盡くしを、遺族の人たちが誰ひとり、なぜ私に知らせてくれなかつたのであらうか。私

追ひ廻す方に目がなくて、逃げる方に目があるんだからな！　どうしたつて取れつこがないや。

ゆくりなく、このうつけた青年の口からこぼれたからこそ。

は座を起つて、コポアヌや、タウクノなどのゐる所へ行つて、その話をして、「なぜそんなよい話を私に聞かしてくれなかつたのだ。」と言つて詰ると、「せめて一匹でも捕れて送れたら、話にもなるが、送つて上げもしない事を、かうした、あゝしたと言つたつて、旦那へ何のたしになる？」三人は聲を揃へて、さういふのであつた。そして新たに思ひ出したやうに、寡婦のタウクノは目を推し拭つてゐた。

自分等の傳統的な生活を掻き亂されるのを避けるために、魚利の磯濱は侵入者に委ねて、段々川添ひに漸退して來たこの人々は、いつでも、默々として損を忍へてゐる人達である。陰ではありつたけの眞心を仕拂つて、知られぬまゝに埋れて行くこの種の純情は、國土開拓の名の下に、昔からどんなに浪費された事であらう。

私はその後、半月餘りコポアヌの家に泊つて、老媼達の傳へてゐる神話や物語詩の筆錄に沈潛した。そしてカバンの裡に收めたアイヌ神話の重いノートと、アイヌ民族の純情に泣く重い心とを懷いて、歸京の途についた。

陰では有りつたけの眞心を仕拂つて、知られぬまゝに埋れて行くこの種の純情は、國土開拓の名の下に、昔からどんなに浪費された事であらう。

土井晩翠
詩人、英文學者
第二高等學校教授
名は林吉
仙臺の人
明治四年生

二四　希望

土井晩翠

沖の汐風吹きあれて、
白波いたくほゆるとき、
夕月波にしづむとき、
黑闇よもを襲ふとき、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

ながき我が世の夢さめて
むくろの土に返るとき、

罪のほだし、

歎き、わづらひ、くるしみの海にいのちの舟うけて。

心のなやみ終るとき、
罪のほだしの解くるとき、
墓のあなたに我が魂を
導く神の御聲あり。

歎き、わづらひ、くるしみの
海にいのちの舟うけて
夢にも泣くか塵の子よ。
うき世の波のあだ騒ぎ、
雨風いかにあらぶとも、
忍べとこよの花にほふ。
港入江の春告げて、

斯の身飢ゆれば斯の兒育たず
斯の兒衰さざれば斯の身飢ゆ
捨つるが是か捨てざるが最か
人間の悲愛斯の心にまよふ
哀愛禁ぜず無情の涙
復た兒顏をうて苦鬼多し
兒が命なくんば斯の心を知れ
慈心頻りに厚き良家の救
去らんと欲して忍び難き別離の悲み
橋畔忽ち驚く行人の語
殘月一声杜鵑啼く

阿佛尼
歌人
藤原爲家の妻
夫の歿後剃髪して阿佛と號した
弘安六年（一二八三）歿

十六夜日記
建治三年（一二七七）十月十六日訴訟のため京都より鎌倉へ下つた時の旅日記。

書の名
古文孝經。

流るる川に言葉あり、
燃ゆる焔に思想あり、
空行く雲に啓示あり、
夜半の嵐に諫誡あり、
人の心に希望あり。

（『天地有情』）

二五　十六夜日記

阿佛尼

昔壁の中より求め出でたりけん書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすがへすも書きおくあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬまつりごとにもれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、なほこの

憂へこそやるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。ひのもとの國に、あまの岩戸ひらけし時、よもの神達の神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりける。

さてもまた、集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度（ふたたび）救をうけて代代に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけん。そのあとにしもたづさはりて、二人の男の兒どもも、もゝちの歌のふる反故どもを、いかなる緣（え）にかありけん、預りもたることあれど、「道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへ。」とて、深きちぎりを結びおかれし細川のながれも、故なくせきとめられしかば、あととふ法（のり）のともしびも、道を守り、家をたすけん親子のいのちも、もろともに消えを爭

一度救をうけて
藤原定家（新古今集、新敕撰集）藤原爲家（續後撰集、續古今集）

二人の男の兒
侍從爲相（十三歲）大夫爲守（十一歲）

細川
和歌所の采邑、播磨國細川の庄。

ふ年月を經て、危く心細きものから、何としてつれなくけふまではながらふらん。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心の闇はなほしのびがたく、道をかへりみる恨はやらんかたなく、さてもなほ、あづまの龜の鏡にうつさば、曇らぬ影もやあらはるゝと、せめて思ひあまりて、よろづの憚りを忘れ、身をようなきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ出でなんとぞ思ひなりぬる。

頃はみ冬たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絕えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事にふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬もましてと

子を思ふ
人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（藤原兼輔、後撰集）

ゆくりもなく。

降りみ降らずみ時雨も絕えず。

人やりならぬ
人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りこん（源寬、古今集）

見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、慰めかねたる中にも、侍從、大夫などのあながちにうち屈したるさまいと心苦しければ、さま〴〵いひこしらへつ。

代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだならぬ限りをえりしたゝめて、侍從の方へ送るとて、書き添へたる歌、

和歌の浦にかきとどめたる藻鹽草
　これを昔の形見とも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥
　一方ならぬ跡を思はば

これを見て、侍從のかへりごと、いと疾くあり。

つひによもあだにはならじ藻鹽草
　かたみを三代の跡に殘せば

迷はまし教へざりせば濱千鳥

和歌の浦　紀伊國海草郡。

三代　俊成、定家、爲家。

昔の人　亡夫爲家。

一方ならぬ跡をそれとも
　このかへりごと、いとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせたてまつりたくて、また打ちしほたれぬ。

二六　靜寬院和宮樣

德富蘇峰

和宮樣の御一代は、いかなる巧妙な小說家も恐らく書くことの出來ないほど、人生のいはゆる悲劇なるものを含んでをります。否寧ろ悲劇そのものであります。

そも〳〵宮樣は、弘化三年閏五月十日、仁孝天皇の第八皇女として、その母方橋本邸にて御降誕遊ばされました。御母は權大納言橋本實久の息女で經子と申し、後には觀行院と稱し、宮樣に從つて東に下つた方であります。

かくて宮樣は六歲の時に、有栖川宮に入門遊ばされ、てにをはを

德富蘇峰　文學者、歷史家　貴族院議員　名は猪一郎　熊本の人　文久三年生

弘化三年（一八四六）　仁孝天皇　第百二十代。弘化三年正月崩御。御年四十七。

橋本實久　姓は藤原。閑院家の一族。

學ばせ給ひ、同時に、幟仁親王の御子熾仁親王と御婚約を結ばれました。

當時の時世は、申すまでもなく維新大改革の序幕で、尊王攘夷論の最も流行した時節でありました。こゝに於て朝廷側も幕府側も、この日本の國家を平安に維持してゆくには、朝廷と幕府とが合體するより他はないといふ意見で、こゝに公武合體論なるものが出て來たのであります。それには、まづ朝廷と幕府との間を親密にせねばならず、そのためには、將軍家に朝廷より皇女の御降嫁を願ふ他はないといふことになり、盛んにその運動が起つたのであります。

靜寬院宮（池田輝方筆）

親行院
慶應元年（一三五二）薨。

幟仁親王
有栖川宮第八代の宮。明治十九年（一三四六）薨。御年七十五。

熾仁親王
幟仁親王第一王子。明治二十八年（一三五五）薨、御年六十一。

萬延元年
（一三六〇）

孝明天皇
第百二十一代。慶應二年（一三六六）崩御、御年三十六。

かくて萬延元年、和宮樣御年十五の時に、京都所司代酒井忠義が、江戸老中からの奉書を奉つて、御降嫁を奏請いたしました。然るに、皇女を關東へ降嫁遊ばされるといふ事は、德川幕府始つて以來、否、溯つていへば、鎌倉幕府開設以來の事でありますので、孝明天皇は御許可あらせられなかつたのであります。そこで、忠義は關白九條尙忠について重ねて敕許を請願し、終には天皇の思召に從ひ、攘夷を實行するといふ條件まで持ち出して切願いたしました。

これ程までにも幕府が至誠を披瀝して敕許を願つたので、孝明天皇も今は致し方なしと思し召し給ひ、和宮樣の御生母橋本觀行院の御弟橋本實麗をして、宮に御降嫁をお勸めになりましたが、宮はたゞ一途に御上書をもつて御斷りを申し上げられました。

こゝに於て孝明天皇には、御妹たる宮からは不承知の御旨を言上され、江戸からはいかなる朝廷の御命令にも服從し奉るから是

安政六年（三五九）

文久元年（三六一）

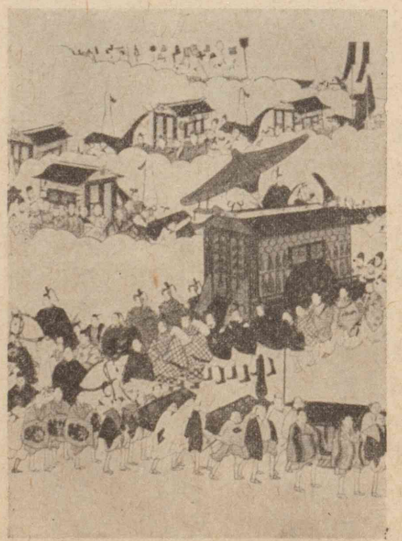
家茂　安政二年（三五八）將軍宣下、慶應二年（三六六）歿、年二十一。

非ともと請願され、全く板挟みの姿とならせ給ひ、今は詮方なしとて、和宮様に代ふるに、皇女壽萬宮を以てせんとの聖慮を內示し給ふに至りました。壽萬宮は孝明天皇の皇女で、安政六年三月の御誕生でしたから、漸く十七八箇月ぐらゐの御齡であります。まだ襁褓（むつき）の中に在す姫宮を將軍に御降嫁とは、よく〳〵御困却の末に思し召し立たせられたことであります。かほどまでに孝明天皇が思ひ込ませ給うたに就いては、和宮様にも、もはやこの上は致し方がないと思し召し、いよ〳〵有栖川宮家への御約束を辭して、御降嫁の命を奉ずる旨を奉答せられました。これが宮様の御年十五、萬延元年八月十五日の事であります。かくて文久元年十月二十日、宮様は京都御發輿、中山道を經て十一月十五日江戸御着、次いで十二月十一日には江戸城に御入輿、翌年二月十一日を以ていよいよ御婚儀を擧げさせられました。時に宮様は御年十七、十四代將軍家茂もまた十七歳でありました。

慶應元年（三六五）

長州征伐　慶應元年五月長州の高杉晉作等兵を擧げ、家茂勅命を奉じて征長の事に當つた。

しかしながら宮様は、その夫とし給ふ將軍と御一緒にいらせられた期間は甚だ少かつたのであります。將軍は上洛の期間も數箇月に亙り、慶應元年五月よりは長州征伐のため、江戸を發して上方に滯在し、翌二年七月二十日二十一歳で終に大阪城中に逝きました。



和宮の御東下

されば短い結婚の生涯に猶ほ短い家庭の樂しみを得、しかも御年二十一にして寡婦にならせられた宮様は、その年十二月十九日に御髪を薙り、靜寬院宮と稱せられました。しかも十二月二十五日には、杖とも柱とも頼み給うた孝明天皇も崩御遊ばさ

れたのであります。宮様の御胸中はどんなでありましたらう。

その翌慶應三年には將軍慶喜の大政返上となり、その翌明治元年には伏見、鳥羽の變が起り、つゞいて錦の御旗は堂々と關東を指して、官軍は東海道、中山道から攻め下つて來ました。

この時に於て、もし宮様が尋常一様の婦人であらせられたならば、何の造作もなく京都にお歸り遊ばされたでありませう。しかしながら、自分は既に先帝の敕命によつて、德川家の婦となつたのであるから、どこまでも、一身の安危を外にして德川家のために盡くさねばならぬといふ御誠心をもつて、宮様はあらゆる事に御骨折り遊ばされました。

世間では江戸城の攻撃中止は、西鄕南洲、勝海舟の會見によつて定まつたものと申して居ります。眞にそれに相違ありませんが、もし東京市民が西鄕、勝等を自分等の恩人と思ふならば、私は、和宮

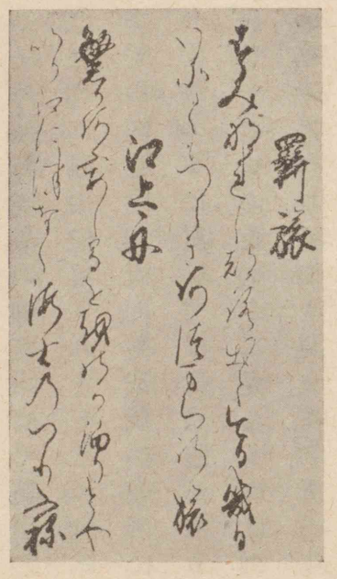
慶喜　十五代將軍。大正二年（一九一三）歿、年七十八。伏見、鳥羽の變　京都の南方伏見、鳥羽にて慶喜の軍と薩長の軍と相戰つた。

西鄕南洲　名は隆盛。鹿兒島の人。明治十年（一八七七）歿、年四十六。

勝　海舟　名は麟太郎、安房守であつたので、後安房と稱し、後更に改めて安芳（ヤスヨシ）と稱した。明治三十二年（一八九九）歿、年七十七。

羈旅　すみなれし都路出でて今日幾日いそぐもつらきあづまぢの旅　江上舟　繫りあふあし間をおのが泊りとやいり江につなぐ海士のつりぶね

様をもまた東京の恩人と思はねばならぬと信じます。のみならず、朝廷が幕府に對して手厚く遊ばし、維新の歷史にまことに有難い光明を添へたのも、悉皆とはいへませんが、半ば宮様の御歎願、おとりなしが與つて力あるものといふことが否定出來ぬのであります。



和宮御筆蹟

大なる事を成すのは、必ずしも大なる策士とか政治家とかいふ人ばかりではありません。苟も誠心あるものがその位置にあり、誠心に隨つて行つた事は、彼にも我にも普遍平等に幸福の結果をもたらすものであります。宮様の事も卽ちその通りであります。

かくて宮様の御骨折によつて、德川家も駿河にて七十萬石を賜

家達（いへさと）　前貴族院議長。文久三年生。明治二年（一三二九）

增上寺　東京市芝區にある。德川家の廟所。

はり、德川龜之助（公爵家達）の相續も出來、すべての事が、宮樣のお願通りに落着しましたから、明治二年正月を以て、宮樣は東京を發し、京都にお歸り遊ばされましたが、明治七年、二十九歲の御時、また東京に御移轉になり、麻布の邸に御住居遊ばされました。そして明治十年八月、脚氣の御氣味にて箱根塔の澤に御轉地遊ばされ、九月二日終に薨去遊ばされました。御年三十二。御遺言によつて增上寺の昭德院廟所即ち家茂の廟所に葬り奉りました。

宮樣の事に就いては、御日記があり、また御消息文もありますが、最もその御心を伺ふに足るものは御歌であります。御歌は一生お嗜みあつたものと見えて、御秀歌も少くないのでありますが、中にも御述懷の歌などには、何ともいへぬものがあります。例へば、

惜しまじな君と民とのためならば
身はむさしのの露と消ゆとも

など、これが二十歲にまだ滿ち給はぬ宮樣の御歌であらうとは、誰も思ひ及ばぬところでありませう。

將軍家茂の薨去を悲しませ給うた御歌の中には、今なほ拜讀して斷腸の思の胸に迫つて來るものがあります。

三つせ川世に柵（しがらみ）のなかりせば
君もろともに渡らましものを

世の中のうきてふ憂を身一つに
とりあつめたる心地こそすれ

また御述懷の御詠に、

數ならぬ身こそつらけれかかる世も
君が力になるよしもなき

今更に人をも世をも恨むまじ
數ならぬ身をひとりかこたん

千古を貫ぬき、萬世に亙つて、我が大和民族の典型たる女性。

といふのがあります。

實に宮樣の御一生は悲劇でありました。そして宮樣は、婦人の大切な貞操を完うし、己のために生活せず、他のもののために生活するといふ奉仕的精神、しかも哀しんで傷らず、恨んで忿らず、運命に忍從して、よく守るところを徹底し給うたことは、實に千古を貫ぬき、萬世に亙つて、我が大和民族の典型たる女性と申し上ぐべき御方のお一人であると信ずるのであります。

舊曆九月　文久元年（一八六一）

馬籠峠　妻籠宿と馬籠宿（當時信州西端の宿、筆者の出生地）との間にある阪道、古名木曾の御坂。長野縣西筑摩郡。

半藏　長篇小說「夜明け前」の中心人物、馬籠宿本陣の息子。

上松、中津川　上松は長野縣、中津川は岐阜縣、共に今中央線の驛になつてゐる昔の宿

二七　木曾路御通行

島崎藤村

舊曆九月も末になつて、馬籠峠へは小鳥の來る頃になつた。最早和宮御迎への同勢が關東から京都の方へ向けて、每日のやうにこの街道を通る。さうなると、定例の人足だけでは繼立も行き屆かない。道中奉行所の小笠原美濃守は公役として既に宿々の見分に來た。

十月に入つてからは、御通行準備のために奔走する人達が一層半藏の眼につくやうになつた。尾州方の役人は美濃路から急いで來る。上松の庄屋は中津川へ行く。早駕籠で、夜中に馬籠へ着く者すらある。尾州の領分からは、千人もの人足が隣宿美濃落合の御繼ぎ所へ詰めることになつて、ひどい吹降の中を人馬共にあの峠の下へ着いたとの知らせもある。

お父さん　半藏の父吉左衞門、馬籠宿の本陣主人。

鵜沼　この宿と本山との間に十九宿ある。

本山　長野縣、洗馬驛と贄川驛との間に在る宿。この邊から南西が木曾谷

「半藏、どうも人足や馬が足りさうもない。俺はこれから中津川へ打合せに行つて、それから京都まで出掛けて行つて來るよ。」

「お父さん、大丈夫ですかね。」

親子はこんな言葉をかはした。道中奉行所から渡された御印書によつて、越後越中の方面からも六十六萬石の高に相當する人足がこの御通行筋へ加勢に來ることになつたが、よく調べて見ると、それでも足りさうもないといふ父の話は半藏を驚かした。

「美濃の方ぢやお前、伊勢路からも人足を許されて、もう觸當に出掛けたものもあるといふよ。美濃の鵜沼宿から信州本山まで、どうしても人足は通しにするより外に方法がない。俺は京都まで御奉行樣の後を追つて行つて、それをお願ひして來る。俺も今度は最後の御奉公のつもりだよ。」

この年老いた父の奮發が、半藏にはひどく案じられてならなかつた。さうかと言つて、彼が父に代はられる場合でもない。街道には街道で、彼を待つてゐる仕事も多かつた。その時、繼母のおまんも父の側に來て、

おまん　吉左衞門の後妻で半藏の繼母。

伊那　天龍川沿の地

「あなたも御苦勞さまです。ほんとに萬事大騷動になりましたよ。」

と案じ顏に言つてゐた。

吉左衞門はなか〳〵の元氣だつた。六十三歲の老體とはいひながら、いざと言へば側にゐるものがびつくりするやうな大きな聲で、

「オイ、駕籠だ。」

と人を呼ぶ程の氣力を見せた。

和宮御迎への同勢の通行で、賑はしい街道の混雜は最早九日あまりも續いた。伊那の百姓は自分等の要求が納れられたといふ

顏付で、二十五人程づつ一組になつて、既に馬籠へも働きに入り込んで來た。やかましい增助鄕の問題の後だけに朝勤め夕勤めの人達を街道に迎へる事は半藏にも感じの深いものがあつた。どうして、この多數の應援があつてさへ、續々關東からやつてくる同勢の繼立に十分だとは言へなかつたくらゐだ。馬籠峠から先は落合に詰めてゐる尾州の人足が出て、荷物の持運びその他に働くといふほどの騷ぎだ。時には半藏はこの混雜の中に立つて、怪我人を載せた四挺の駕籠が三留野の方から動いて來るのを目擊した。和宮のお泊りに宛てられるといふ三留野の普請所では、小屋が潰れて、怪我をした尾張の大工達が歸國するところであるといふ。その時になると、神葬祭の一條も、何もかも、この街道の空氣の中に埋め去られたやうになつた。和宮下向の噂があるのみだつた。

方。中央アルプスを境にして西方が木曾谷、東方が伊那谷。

落合　馬籠宿の次の美濃（岐阜縣）の宿。

三留野　長野縣、今中央線の一驛。馬籠から北東二つ目の宿。

神葬祭云々　佛葬を廢して神葬にするといふ議論を半藏等がこの前にしてゐる。

「伊之助さん、御繼立の御用米が尾州から四十八俵届きました。これは君のお父さんに預つて頂きたい。」

半藏が隣家の伊之助と共に街道に出て奔走する頃には、かねて待ち受けてゐた和宮御用の送り荷が順に到着するやうになつた。この送り荷は尾州藩の扱ひで、奥筋の御泊り宿へ送りつけるもの、その他諸色が澤山の數に上つた。日によつては三留野泊りの人足九百人、外に妻籠泊りの人足が八百人、これらの荷物について西からやつて來た。

「壽平次さんも、妻籠の方で眼を廻してゐるだらうなあ。」

それを思ふ半藏は、一方に美濃中津川の方で働いてゐる友人の香藏を思ひ、この際京都から歸つて來てゐる景藏を思ひ、その話をよく伊之助にした。馬籠では峠村の女馬まで狩り出して、毎日の

お父さん　金兵衞といつて半藏の父と、共にこの宿役の重立つた人。

壽平次　半藏の妻お民の兄。

香藏、景藏　半藏と同志の友人で、平田篤胤の學風を奉じて勤王の志を抱いてゐる人々。

江州　近江國。（滋賀縣）

やうにやつて來る送り荷の繼立をした。峠村の利三郎は牛行司ではあるが、かういふ時の周旋にはなくてならない人だつた。世話好きな金兵衞はもとより、問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衞門、それらの長老達から、百姓總代の組頭庄兵衞まで、殆んど村中總がゝりで事に當つた。その時になつて見ると、金兵衞の養子伊之助といひ、九太夫の子息九郎兵衞といひ、庄兵衞の子息庄助といひ、實際に働けるものは最早若手の方に多かつた。

十月の二十日は和宮が東下の途につかれるといふ日である。まだ吉左衞門は村へ歸つて來ない。半藏は家のものと一緒に父のことを案じ暮した。最早宮の一行が江州草津まで動いたといふ二十二日の明け方になつて、吉左衞門は夜通し早駕籠を急がせて來た。

京都から名古屋へ廻つて來たといふ父が途中の見聞を語るだけでも、半藏には多くの人の動きを想像するに十分だつた。宮が出發の日には、帝にも御忍びで桂の御所を出て、宮の旅裝を御覽になつたといふ。

桂の御所　今桂離宮、京都府葛野郡桂村に在り、東は桂川に沿ひ、西は西山一帶を望み北は嵐山に對す。

「時に、送り荷はどうなつた。」

といふ父の無事な顏を眺めて、半藏は尾州から來る荷物の莫大なることを告げた。それが既に十一日もこの街道に續いてゐることを告げた。

伏見屋　金兵衞の家名

道路の改築もその日から始まつた。半藏が家の表も二尺通り石垣を引込め、石垣を取直せとの見分役からの達しがあつた。道路は二間にして、道幅はすべて二間通しといふことに改められた。石垣は家毎に取り崩された。この混雜の後には、御通行當日の大釜の用意とか、膳飯の準備とかが續いた。半藏の家でも普請中で取り込んでゐるが、それでも相應な仕度を引受け、上の伏見屋なぞ

では百人前の膳飯を引受けた。

やがて道中奉行が中津川泊りで、美濃の方面から下つて來た。一切の準備は整つたかと尋ね顏な奉行の視察は、次第に宮の一行の近づいたことを思はせる。順路の日割によると、二十七日、鵜沼宿御晝食、太田宿御泊りとある。馬籠へは行列拜見の客が山口村からも飯田方面からも入り込んで來て、いづれも宮の一行を待ち受けた。

そこへ先驅だ。二十日に京都を出發して來た先驅の人々は、八日目にはもう落合宿から美濃堺の十曲峠を越して、馬籠峠の上に着いた。隨行する人々の中には、萬福寺に足を休めて行くものが百二十人もある。先驅の通行は五つ半時であつた。奥筋へ行く千人あまりの尾州の人足がその後に續いて、群衆の中を通つた。それを見ると、伊那から來てゐる助鄕の中には腕をさすつて、是非

太田　鵜沼の一つ手前で、馬籠宿から八つ目の美濃の宿。山口村　馬籠宿の西隣、

十曲峠　山口村の坂で、馬籠宿と岐阜縣落合宿との中央（十石峠とも書く）。

萬福寺　この宿の古刹

とも御輿をかつぎたいといふものが出て來る。半藏は父と同じやうに、麻の裃をつけ、袴の股立ちを取つて、親子してその間を奔走した。

翌日は和宮が中津川御泊りの日取である。その日は雨になつて、夜中からひどく降り出した。しかしその大雨の中でも、最早道固めの尾州の家中が續々馬籠へ繰り込んで來るやうになつたので、吉左衞門も半藏も全く一晩中眠らなかつた。

いよ〳〵馬籠御通行といふ日が來た。本陣の假住居の方では、おまんが孫の側に眼をさますと、半藏も父も徹夜でいそがしがつて、殆んど家へは寄りつかない。

おまんは佐吉を呼んで、孫のお粂をおぶはせ、村はづれに宮を迎へさせることにした。そこへ來た新宅のお喜佐には宗太をつけて、これも家の下女達と一緒にやることにした。

佐吉　半藏家の下男。
お粂　半藏の長女。
お喜佐　おまんの娘で、半藏には異母妹。
宗太　半藏の長男

「粂さま、お出。」と佐吉はお粂を背中にのせて、その顔をおまんに見せながら、「これで粂さまも、今日あつたことをずつと大きくなるまで——覺えてゐられるだらうか。」

「なにしろ六つぢやねえ。」

「覺えてはゐられまいか。」

「さうばかりでもないよ。」とお喜佐は二人の話を引取つて言つた。「この兒もこれで、夢のやうには覺えてゐるだらうよ。わたしだつて、五つの歳のことをかすかに覺えてゐるもの。」

佐吉はお粂を、お喜佐は宗太をまもりながら、行列拜見の人々が集まる村はづれの石屋の坂あたりまで行つた。なにしろ多勢の御通行で、佐吉等は吉左衞門や半藏の働いてゐる姿をどこにも見出すことが出來なかつた。それに、御通行筋は公私の領分の差別なく、旅館の前後里程三日路の旅人の通行を禁止するほどの警戒

振りだ。

九つ半時に、姫君を乘せた御輿は軍旅の如きいでたちの面々に前後を護られながら、雨中の街道を通つた。嚴めしい鐵砲、纏、馬簾の陣立は、殆んど戰時に異ならなかつた。供奉の同勢はいづれも陣笠、腰辨當で、供男一人づつ連れながら、その後に隨つた。中山大納言、菊亭中納言、千種少將、岩倉少將、その他宰相の典侍、命婦能登などが供奉の人々の中にあつた。京都の町奉行關出雲守が御輿の先を警護し、御迎へとして江戸から上京した若年寄加納遠江守、それに老女等もお供をした。これらの行列が動いて行つた時は、馬籠の宿場も暗くなるほどで、その日の夜に入るまで驛路に人の動きの絕えることもなかつた。

「いや、御苦勞、御苦勞。」

御通行の翌日、吉左衞門は三留野の御繼ぎ所の方へ行く尾州の竹腰山城守を見送つた後で、いろ〳〵後始末をするため會所の中にある宿役人の詰所にゐた。吉左衞門はそこにゐる人達をねぎらふばかりでなく、自分で自分に言ふやうに、

「御苦勞、御苦勞。」を繰返した。

連日の過勞に加へて、その日も朝から雨だ。一同は疲れて、一人として、行儀よくしてゐるものもない。そこには金兵衞もゐて、長い街道の世話を思ひ出したやうに、

「吉左衞門さんは御存知だが、わたしたちが覺えてから大きな御通行といふものは、この街道に三度ありましたよ。一度は水戸の姫君さまの御輿入れの時。一度は尾州の先の殿樣が江戸でお亡くなりになつて、その御遺骸がこの街道を通つた時。今一度は例の黒船騷ぎで、交易を許すか許さないかの大評定で、尾州の殿樣の

尾州の殿樣　德川慶勝

御出府の時。あの先の殿樣の時は、木曾谷中から寄せた七百三十人の人足でも手が足りなくて、伊那の助鄕が千人あまりも出ました。諸方から集めた馬の數が二百二十匹さ。」

「金兵衞さんはなか〳〵覺えがいゝ。」と疊の上に頰杖つきながら言ふものがある。

「まあ、お聞きなさい。今の殿樣が江戸へ御出府の時は、木曾寄せの人足が七百三十人、伊那の助鄕が千七百七十人、この人數を合せると二千五百人からの人足が出ましただ。あの時、馬籠の宿場に集まつた馬の數が百八十匹だつたと思ふ。あれほどの御通行でも和宮さまの場合とは到底比べものにならない。今度のやうな大きな御通行は、わたしは古老の話にも聞いたことがない。」

「どうです。金兵衞さん、これこそ前代未聞でせう。」

と混ぜ返すものがある。金兵衞は首を振つて、

前代未聞　これは金兵衞のよく口にする言葉。

「いや前代未聞どころか、この世初まつて以來の大御通行だ。聞いてゐるものは皆笑つた。

いつの間にか吉左衞門は高鼾だ。彼はその部屋の片隅に横になつて、まるで死んだやうになつてしまつた。

（『夜明け前』）

純正女子國語讀本　卷六終

昭和十二年七月二十五日印刷
昭和十二年七月二十八日發行
昭和十三年一月二十五日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行

純正女子國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢

編纂者　五十嵐力
發行者　東京市牛込區原町二丁目四十六番地　山田謙吉
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　五十嵐良晃

◆發行所　東京市牛込區原町二ノ四六　早稻田圖書出版社　振替東京一三六一五三番

◆關西特約販賣所　大阪市東區北久太郎町四ノ一六　合資會社　柳原書店

大日本印刷株式會社榎町工場印刷

山陽高等女学校
第三学年乙一組
ヲルリ子